

# 1 / 16 の牝奴隷



濠門長恭

## 目次

[序文]	- 3 -
1. 異母姉は奴隷	- 4 -
2. あばかれた血筋	- 32 -
3. 白人から奴隷に	- 80 -
4. 父親への性奉仕	- 119 -
5. 鎖の貞操帯	- 155 -
6. 競売と自由	-
7. 娼館への罣	-
8. 娼館の日常	-
9. 強制された背徳	-
10. 母娘狂艶	-
後書き	- 412 -

章単位で「しおり」を設定しています。閲覧時にご利用ください。

## [序文]

奴隷制度は、運用のあり方によってはそれほど非人道的ではないのかもしれない。古代ローマでは、奴隷とは諸々の事情により自由を制限された**人間**だと理解されていた。所有者の気まぐれで殺されたり、苛酷な労働を課される例もあったが、家族に準じた扱いを受けることも珍しくはなく、有能な者には立身出世の道さえ開かれていた。

一方、特定の人種を自分たちより劣るとする人種差別は、人道の対極に位置づけられる。ことに、有色人種はもの言う**家畜**にすぎないという思想が宗教で正当化されたとき、悲惨な状況が現出することは想像に難くない。

人種差別と奴隷制度を是認する国家が、もしも近代に存在していたらという仮定に基づいたこの物語が、読者の心に非人道的な制度への嫌悪を醸成し得たとしたら、作者は付言を要さない。

## 1. 異母姉は奴隷

一面の緑におおわれた丘の稜線を二頭の馬がのんびりと進んでいる。

先に行く馬には、仕立ての良い服に身を包んだ青年。薄茶色の髪をきっちりと固めて紳士を気取っているが、陽に焼けた顔に散る雀斑が、彼の年齢を物語っていた。

後ろの馬には、肩まで垂れた金髪を白いリボンで無雑作に束ねた乗馬服姿の少女。身体にぴったり合った服が、実際以上に胸の盛り上がり尻の丸みを強調して、年若い少女を青年と同じくらいの年齢に見せかけていた。

二頭の後ろには、それぞれの女中が徒歩で従っている。

小さな林にさしかかったところで、乗馬服姿の少女――エレオノーラ・グレイが青年に呼びかけた。

「トミィ、ここでランチにしましょう」

トーマス・ミラーが馬からおりてエレオノーラに近づいたが、彼女はいつもの習慣で、さっさと馬からおりてしまった。差し伸べた手をトーマスが所在無げに引っ込めるのを見て、エレオノーラは淑女らしくふるまう機会を逃がしたと気づいたのだが、もうどうしようもなかった。

二人の女中は大きなシートを木陰に広げて、ピクニックボックスから出した食器を並べていった。

エレオノーラは、自分が指図して作らせた料理を鞍に提げたバスケットから取り出して――不機嫌な表情になった。

「メグ、ワインを忘れたの？」

エレオノーラ付きの女中、二十歳になる奴隷娘のメグは、首を横に振った。

「置いてきました。殿方とふたりきりでワインをお飲みになるのは、まだ早すぎるのではないかと奥様のご心配でしたので」

「ワインを置いていくようにと、ママがおま

えに命じたのね？」

「いいえ。わたしも、奥様のお考えと同じでしたので」

「なんですって!？」

エレオノーラは痲癩玉を破裂させた。

「つまり、おまえは主人の命令に背いたのね」

「お父様も同じようにお考えだと思いますよ」

「お父様ですって……!？」

メグは、エレオノーラの父が奴隷女に手を付けて産ませた子だった。血の上では異母姉にあたるのだが、肌の色がやや薄いというだけで、白人の形質は表われていない。

エレオノーラには、この奴隷娘が何かにつけて自分の姉のように振る舞うのが気に食わなかった。黒人も魂を持った人間だとか言ってママが甘やかすから、つけ上がるんだ。今日こそははじめを示してやろうと、エレオノーラは決心した。

「あたしのパパは、おまえのなんなの？」

「それは……もちろん、ご主人様です」

「自分の父親だなんて、思っただけでいいでしょうね？」

メグが、はっとした顔でエレオノーラを見た。妹を心配するあまり、なれなれしくし過ぎたと悟った。

「スカートをたくし上げて、そこへ四つん這いになりなさい」

エレオノーラは乗馬鞭を手にして立ち上がった。

「お許してください、お嬢様。これからは気をつけます」

ひざまずいて両手を胸の前で組むメグを見下ろして、エレオノーラは鞭の先端でぴしゃりと頬を叩いた。

「まだ命令に従えないの？ それなら、いいわ。パパに言いつけて、ジョッシュに手加減無しの折檻をしてもらおうから」

ぶるっと、メグは身震いした。奴隷監督のジョッシュは、乗馬鞭など使わない。彼が本

気で懲罰用の巻き鞭を振るえば、一発で肌が裂けてしまう。

メグはスカートを腰の上までまくって、草原に両手をついた。

「トミィ。この奴隷娘の下穿きを脱がすように、あなたのメイドに言いつけてくださる？」

ジョッシュで脅さないと命令に従わなかったメグへの罰は、衣服の上から鞭打つくらいでは足りない。エレオノーラは、ますます怒りをつのらせていた。

「タラ……」

トーマスは顎をしゃくって、自分の奴隷娘をうながした。タラはちょっとだけ哀しそうな顔になって、メグの下穿きを膝までずり下げた。草原のただ中に晒された豊満な褐色の双丘は、ひどく場違いで扇情的だった。

エレオノーラが右腕を高々と振り上げて、乗馬鞭を双丘に叩きつけた。

パッシィン！

乾いた音が春のそよ風を切り裂いた。



メグはぴくっと肩を震わせただけで、呻き声も出さない。乗馬鞭には、馬を傷つけない工夫がされている。その鞭を振るっているのは、水汲みさえもろくにしたことのない非力な少女だ。瞬間的な痛みはあっても、肉体へのダメージは無いに等しい。

それはエレオノーラにもわかっている。わかっているから、鞭を振り下ろすたびに腹立たしさがつのっていく。

二十発も鞭打つと肩が痛くなって、メグは鞭を放り出した。

「これくらいにしといてやるわ。今度逆らったら、本当にジョッシュに頼むからね」

荒い息を吐きながら、なんとか威厳を取り繕うエレオノーラ。メグはといえば、褐色の肌に不鮮明な鞭跡を幾つか描かれて、けろりとしていた。

「奴隷なんかほっといて、食事にしよう」

トーマスがシートに陣取って、恋人（にしたいと思っている娘）を手招いた。

「そうね。あたしも、すっかりおなかが減ってしまったわ」

エレオノーラも恋人（になってくれたらいいなと思っている青年）の隣に座った。

女中たちは、邪魔にならないようシートから一ヤードばかり離れて後ろに座っている。

恋人候補同士のランチは、しごく淡々と進んだ。エレオノーラは料理にいろんな工夫を凝らしていたが、それを自慢するほど無邪気でも馬鹿でもなかった。トーマスは、女の子がどんな話題に興味を示すか見当もつかなかったので、この春は仔馬が二十頭も産まれたのだ、グレイ家の綿花畑は去年よりも広くなったのだ、当たり障りの無さすぎることをぼつりぼつりと口にするだけだった。これではいけないと話題を転換して。

「優秀な素質を受け継がせるために、家畜を親子で交配させることだって珍しくはない」

なんとかそれらしい方面へ話題を振ろうとして、唐突に言ってみたりする。

しかし、相思相愛のふたりに語らいは不要だった。わずかなきっかけさえあれば。

「あ……デザートにアップルパイを用意してあるのよ」

バスケットに伸ばしたエレオノーラの手を押さえるトーマス。

「いや、ぼぼぼ、僕は……チェリーがいいな」

「チェリー？ 季節外れよ」

「だって、目の前にあるよ。ほら……」

エレオノーラを引き寄せて、その唇に唇を重ねるトーマス。

「むう……」

エレオノーラは唇を奪われて、恋する青年の胸にしなだれかかった。

「愛してるよ、エレン……」

トーマスの手が乗馬服の胸元に差し入れられて、柔らかな膨らみをそっと包む。

「そろそろ戻らないと、奥様が心配なさいますよ」

メグが絶妙のタイミングで水を差した。

エレオノーラは我に還って、顔を紅く染めた。羞恥ではない。キスだろうと愛撫だろうと、いや排泄行為だろうと、家畜に見られて恥ずかしいわけがない。

「奴隷のくせに、いちいち主人に指図をするつもりなの？」

家畜が人間らしい分別をはたらかせて主人の行動を妨げようとした、その思い上がりにエレオノーラは怒り狂っていた。

「もう許せない。おまえの立場を思い知らせてやる。家畜のくせに服なんか着てるんじゃない。素っ裸になって、そこに立ちなさい」

「エレン、奴隷の言葉なんか無視しておけよ」  
「いいえ、奴隷をきちんと躰けるのは飼主の義務よ」

メグは悲しそうな目で腹違いの妹を見上げて。立ち上がると衣服を脱ぎ始めた。農作業で鍛えられた逞しい腕が、挑発的に乳首を突き出した豊満な胸が、子供のころに激しく鞭打たれた傷跡をうっすらと留めている背中が、

肉感的だが引き締まった太腿が、そして女性にとってもっとも恥ずかしい箇所までが白日の下に晒された。

そこには秘裂を隠すべき翳りがなかった。かわりに――横長のハートの枠に囲まれた S L A V E の文字が、薄ピンク色に浮かび上がっていた。それはエレオノーラの父親が、手を付けた牝奴隷に施す焼印だった。

「へえ……話には聞いていたが、見るのは初めてだ」

トーマスが興味津々にメグの股間に顔を近づけた。奴隷に焼印を捺す所有者も皆無ではないが、これほど凝ったデザインは珍しい。

彼のズボンがテントを張っているのは、若い女の裸身を見たせいだけではないだろう。グレイ家の当主は牝奴隷を抱く前にその毛を剃ってしまうという噂が事実だったこと、股間の滑らかさを見ると過去数日のうちに抱かれているに違いないという推測。そして何より。父親が実の娘を犯すという、人間同士

なら父娘とも縛り首にされかねない背徳の構図。そのすべてが、若いトーマスを興奮させていた。

今日のキスが初めての経験だった初心なエレオノーラでも、恋人と思い定めている男が自分よりも奴隷娘に興味をひかれていることくらい察知できる。もちろん、人間が家畜に嫉妬するなんてことはないのだけれど。この奴隷娘は、自分の母親を孕ませた人間に抱かれて平然としている恥知らずだった。そんな女は、こっぴどく懲らしめてやらねばならないのだけれど。たとえ自分の奴隷であっても、殿方を差し置いて女主人然と振る舞うのものはしたない——エレオノーラは、そんなふうに自分の心を偽った。

「わたしの力では、この奴隷を存分に懲らしめられないわ。トミィ、あなたの逞しい手でこいつの乳房を叩いてくださらない？」

「ふうん……」

トーマスは奴隷娘の正面に立って、その重

みを計るように左手で乳房を持ち上げた。ぎゅっと乳房をつかまれても、メグは身じろぎひとつせず、宙を見つめて立ち尽くしている。

「姫君の思し召しのままに」

芝居がかったお辞儀をしてから。

「両手を頭の後ろで組め。姿勢を崩したら罰を追加するぞ」

冷酷というよりは、牛を追い立てるときのように感情を欠いた声で奴隷娘に命令した。

メグは言われたとおりの姿勢を取った。叩かれてもよろけないようにと、両脚を開いて踏ん張った。

「なかなか、躰が行き届いているね」

羞恥心に乏しい家畜でも、若い牝が自発的に脚を開くには、それなりの覚悟がいる。そのことを、トーマスは評価したのだった。

トーマスは右手を大きく振りかぶって、スナップを利かせたビンタを奴隷娘の乳房に叩きつけた。

バシン！

メグの乳房がぐにゅっとひしゃげて、ぶるると弾んだ。

バシン！

反対側の乳房に手の甲が叩きつけられる。

「く……」

喰いしばったメグの歯のすきまから、かすかに息が漏れた。

バシン！　バシン！

命じられたとおりに姿勢を崩すまいとしてメグは苦痛を耐えているのだが、それがエレオノーラには不遜な態度に思えた。

「トミィ、鞭を使いなさいよ」

ふたりの恋路を邪魔した奴隷娘を痛めつけることに、トーマスも異存はない。エレオノーラの差し出した乗馬鞭を受け取って、ヒュッと素振りをくれた。

さすがにメグは顔を引き攣らせたが、妹の性格を知悉しているので慈悲を乞ったりはしなかった。

パシイイン！



乗馬鞭が乳房の先端を右から左に薙ぎ払った。

「ひいっ……」

乳首を切り裂かれるな鋭い痛みに、メグは悲鳴をあげた。頭の後ろで組んでいた手をほどいて、乳房をおさえた。

「姿勢を崩すな」

(トミィは楽しんでるみたい)

エレオノーラは、青年のわずかな声の変化に気づいた。が、たいていの男が内心に秘めている屈折した欲望についての知識が皆無の少女には、トーマスの心を理解できなかった。

メグが乳房から手をはなして頭の後ろで組む瞬間を狙って。

パッシイイン！

鞭が乳房の根元に喰い込み、柔肌をぐいとえぐりながら走り抜ける。

「ひいい……」

メグの悲鳴が尾を引いた。が、腕は頭の後ろに保たれていた。

パシイイン！　パシイイン！

鞭の先端がX字を描いて、メグから細い悲鳴を引き出した。

「これくらいで勘弁してやろうよ」

予想外に軽い罰にエレオノーラは不満だったが、残酷な女とは思われたくないので頷いた。

「最後に、姿勢を崩した罰だね」

トーマスは豊満な乳房をひとつずつ両手に握った。掌に包みこめず、親指と人差し指の作る大きな半円から乳暈が顔を覗かせている。トーマスは、乳房の根元に深々と指を喰い込ませた。

「ああっ……」

メグが口を半開きにして苦悶の声を吐き出した。

「あ、ああ……お、お赦しを……」

ぎりぎりとして乳房をひねられて、ついにメグは慈悲を願った。

「それじゃ、こっちは許してやる」

トーマスは左の乳房を解放してやった。そして、空いた手で右の乳首を力いっぱいに抓った。

「きひいいっ……」

これまでになく切迫した声で、メグが痛みを訴えた。

「女の身体は先端が急所なんだよ」

後輩に教えを垂れる調教師といったところだった。

「もっと厳しく罰する場合には……」

トーマスは語尾を濁した。股間にひそむ突起を虐めるのだと言ってしまうと、同じ肉体的構造を持つ少女がどう反応するか、不安になったのだ。

「お父さんか奴隷監督に聞いてみろよ」

トーマスは、この奴隷娘にそこまでの責めを加える情景を頭に描き、ズボンがきつくなるのを感じて前かがみになった。しかし、奴隷娘の姿にエレオノーラを重ねることまではしなかった。まともな人間なら、牝奴隷と淑

女とを同一視するはずがなかった。

なんとなく中途半端に、メグへの折檻が終わってしまった。異母姉に着衣を許さず、素裸ですべての荷物を持ち帰るよう命じることで、エレオノーラはどうにか鬱憤をおさめた。

トーマスは恋人（にかなり近づいた少女）を屋敷まで送り届けると、颯爽と駆け去った。トーマスの女中が息を切らせながら、その後を追う。

エレオノーラは自分付きの女中に許しを与えてから、二階の自分の部屋へ行った。下働きのジョンが壁紙の張り替えをしていた。

「あら、まだ終わってなかったの」

「申しわけないです。ご主人様に急用を言いつかりましたので」

エレオノーラよりひとつ若いこの少年は手先が器用なので、グレイ家では重宝していた。

エレオノーラは乗馬服を脱ぎ、ブラウスと下着も脱いだ。少年がいても平気だった。犬

や猫に裸を見られて恥ずかしいと思う人間はいない。

横向きの裸身をドレッサーに映して見て、エレオノーラはふっと眉を曇らせた。

（男の人って、胸が大きい女の子を好むのかしら？）

メグの乳房を弄んだとき、トーマスは平静を装っていたけれど、目が輝いていた。

（あと五年のうちには、あたしのおっぱいだってあいつに負けなくらい豊かになるんだから）

と、信じたいのだけれど。エレオノーラの母親はほっそりしていて、子供は彼女ひとり。メグの母親はいかにもグラマラスで、子供は五人。血統の段階で勝負がついていた。

ふっと気づくと、ドレッサーの近くで壁紙を張っているジョンの様子がおかしかった。動作が緩慢で、腰を引いた不自然な姿勢だった。

（まあ、なんてこと？）

牡の家畜が人間の女性の裸身を見て興奮するなんて、許されていていいことではない。叱ろうとして、エレオノーラは悪戯心を起こした。トーマスも同じような反応を示していたのを思い出したし、メグへの憤りもくすぶっていた。

「下穿きも汗で濡れているわね」

ジョンに聞こえるように言ってから、エレオノーラは全裸になった。その姿で、腰に手を当てて少年に正対した。

「おまえ、なんでそんなへっぴり腰をしてるの。まさか、あたしの裸を見て邪まな心を起こしたんじゃないでしょうね？」

「けっして、そんなことは……」

「それならズボンを脱いで、おまえのペニスがどんなふうになっているか、見せなさい」

「そんなふしだらなことはできませんです」

「なにが、ふしだらよ。人間のあたしが裸になっているのよ。家畜のおまえが服を着ているなんて、変だわ」

強く言われて、ジョンはうつむいた。お嬢様の勝ち気で高慢な性格は、少年も知っている。少年は視界から娘の眩しい裸身を締め出して、ゆっくりとズボンを下げていった。そんな努力にもかかわらず、短い下穿きを突き抜けて少年の腹に密着したペニスが、少女の目に晒された。

「まあ！　ほんとうに、ふしだらね」

鏡台に置いていた乗馬鞭を手にして、エレオノーラはペニスの先端をつついた。ぴくっと、少年の腰が震えた。

「うあ……おゆるしてください、お嬢様」

「下穿きも脱ぐのよ」

少年は整った顔立ちを哀しそうにゆがめて、若い女主人の命令に従った。圧迫から解放されたペニスは、ますますいきり勃つ。

(元気はいいけど……まだ子供だから、こんなものよね)

牧場の子供が幼い時分から牛馬の種付を見て育つように――エレオノーラも、奴隷同士

の交尾を幾度も目撃している。そんな彼女の目から見ると、六インチ（十五センチ）そこそこの少年のペニスは可愛いとさえ思えるサイズだった。

「これが邪まな心の証しじゃないのなら、なんだっていうの？」

前を隠そうとする少年の手を乗馬鞭でピシヤリと払いのけて、亀頭部をチップ（先端の平たい部分）で軽く叩いた。とたんに……びくびくっと少年の腰が痙攣した。

「ああっ……！」

おびただしい量の白濁が真上に噴出した。

「うわっ……汚い！」

あわててエレオノーラは跳びのいた。さいわい彼女にはかからなかったが、床が汚れてしまった。

「この馬鹿。さっさと拭き取りなさい」

少年はあたりを見まわしたが、モップも雑巾もなかった。

「おまえの下着で拭けばいいでしょ。ああ、



駄目よ。そのままかがんだら、上着から垂れるじゃない。素っ裸になりなさい」

それが、エレオノーラに思いつくかぎりの少年への辱めだった。床に這いつくばらせて舌で汚れを舐め取らせるという発想まではなかった。

エレオノーラは手早く普段着に着替えると、床の清掃を終えて手持無沙汰に立ち尽くしている全裸の少年を屋敷の外へ追い立てようとした。

階段の下に、母親のジェニファーが立っていた。

「まあ……裸で。何があったの？」

「おお、奥様……！」

ジョンが階段を駆け下りてジェニファーの足元にひざまずいた。

「おいら、もう二度とお嬢様にふしだらなことで、考えねえです。だから、どうかおゆるしてくださいです」

「そうよ。こいつ、あたしの着替えを盗み見

して、淫らなことを考えたのよ」

エレオノーラが勝ち誇ったように言った。

「だから、パパに言いつけて、うんと厳しく罰してもらおうの」

「勘弁してやりなさい、エレオノーラ」

ジェニファーが娘をたしなめた。

「男の子が女性の肌を見れば、勝手に肉体が反応してしまいます。それくらいは見逃してやりなさい」

「家畜が人間の裸を見て興奮するなんて、間違っているわ」

フルスペルで名前をよばれたくらいでびくつく少女ではなかった。

「間違った行為はその場で罰しなければ、動物の躰はできないわ」

「その子は肌が黒いけれど、それでも人間です」

「人間というのは、白人の同義語よ」

それは父親の受け売りだった。

「かりに、こいつが人間だとしても……肌に

色がついてるのは、神に呪われた証だわ。白人よりも頭が悪くて薄のろで貪欲で卑劣で、生まれながらの犯罪者よ。あたしたちが奴隷として働かせてやらなければ、野垂れ死にするような劣等人種なのよ」

まくし立てると、エレオノーラは少年の腕を引っ張って外へ連れ出した。

「パパ！　パパはいないの？」

「親父ならサロンへ行ってるよ」

騒ぎを聞きつけて、兄のウィリアムが姿を現わした。ここひと月ほど、父のチャールスは午後の数時間を町のサロンで過ごすのが日課になっていた。つぎの町長選挙に打って出て、富のつぎは名誉を狙っている。

「いったい、なんの騒ぎだ。ジョンに襲われでもしたのかい？」

「まさか」

エレオノーラは手短かに事情を説明した。

「ジョッシュを呼んできてちょうだい。彼に鞭打たせるわ」

ジョッシュュが鞭打ちの名手というわけではない。むしろ逆だった。適度の強さで打つのが苦手で、だから相手に過度のダメージを与えてしまう。

「それは、この華奢な子供には可哀そうだ。俺が懲らしめるから、それで赦してやれよ」

「それで、いいわ」

エレオノーラが兄の言葉に異を唱えるはずもなかった。先妻の忘れ形見であるウィリアムは、エレオノーラが世界で二番目に愛している人だった。もちろん一番目はパパで、三番目はママかトミィのどちらかだ。

ウィリアムは近くにいた老僕に、懲罰用の巻き鞭を持ってくるよう命じた。馬をつなぐ柵のところへ少年を追い立て、両腕を広げた形で後ろ向きに縛りつけた。

老僕が、悲しそうな顔で巻き鞭をウィリアムに差し出した。長さが十フィート（三メートル）もあるしなやかな鞭で、外見は牛追いに使う鞭とそっくりだ。牛追い鞭は動物を威

嚇する目的で派手な音が鳴るように工夫されているが、細いピアノ線を鞣革で編み上げた懲罰用の巻き鞭は音よりも痛みが大きい。

ウィリアムが巻き鞭をかまえたときには、二十人ちかい女中や老僕がふたりを取り巻いていた。彼らの見守る中で、ウィリアムは巻き鞭を振るった。

ヒュンッ……パシイン！

「ぐっ……」

少年が呻き声を漏らした。尻にはくっきりと鞭痕がついたが、肌が裂けるほどではなかった。

パシイン！　パシイン！

スナップを利かせて十分な痛みを与えているが、当たる瞬間に腕を引くので鞭が絡みついて不必要に肌を傷つけることはなかった。ジョンは仕事を怠けたり盗みをはたらいたり、暴力で主人に反抗したわけではない。これくらいの懲罰が妥当なところだった。

ウィリアムは尻に十発の鞭をくれたあとで、

背中を強く二回打った。それは、悲しそうな目で眺めている継母への反発だったのかも知れない。

少年の縄がほどかれると、人垣の中から母親と姉が飛び出してきた。

「息子が粗相しまして、申しわけございませんです。わっしからも、よく言い聞かせますんで」

「軽い罰で赦していただき、ほんにありがとうございます」

ジョンを両側から支えて一家の小屋へ連れ帰った。

「おまえも慎みなさい」

屋敷へ戻ってから、ウィリアムは妹を軽く叱った。

「家畜といっても、人間と交配できるのだから。わざと挑発するんじゃない」

性器への刺激がなければ思春期の少年といえどもそうそう射精するものではないのだから——気まぐれなお嬢様が奴隷をからかった

のだろうとは、すぐに想像がつく。

まるで現場を目撃していたかのような兄の口ぶりに、エレオノーラはしゅんとなった。

「ごめんなさい。これからは気をつけます」

それでも、スカートの裾をつまんでわざとらしく淑女の礼をしてから自分の部屋へ引きあげたあたり、堂に入った勝ち気っぷりだった。

## 2. あばかれた血筋

土曜は農園の見回りを午前十時には終えて、町まで買いに行かせた週刊新聞を昼まで読むのが、チャールス・グレイの習慣だった。しかし、この日は違っていた。

新聞を手にとった瞬間、彼は苦い顔になった。しかし記事を読み進むうちに、その顔は真っ赤に染まっていった。

「ウィル、町へ行くぞ。デュースの組を呼べ。おまえもついて来い」

新聞を握りしめて二階へ駆け上がったチャールスは、ガンベルトを締めて戻ってきた。

「ダーリン、ランチはどうするの？」

妻のジェニファーが、のんびりと訊ねた。夫が熱くなればなるほど、ふだんよりおっとり構えるのが彼女なりの亭主操縦術だったが、今日ばかりは通用しなかった。

「いらん」



ぶっきらぼうに答えて、チャールスは出て行った。

「七人か。喧嘩と決まったわけでもないから、四人でいい。ショットガンを忘れるな」

矛盾した命令を怒鳴りながら、チャールスはもう馬を走らせている。ウィリアムがあわてて後を追ひ、デューズと二人の部下は武器を取りに戻った。

「対立候補と決闘でもする気かしら？」

ジェニファーは不安を紛らそうとして、笑えない冗談を言った。小さな鉛玉を広範囲にばら撒くショットガンは、近距離での殺傷能力が拳銃とは桁違いだ。喧嘩や決闘どころか、大量殺人になりかねない。チャールスが新聞を持って行ってしまったので、なにが夫をそこまで激怒させたのか、彼女には見当もつかなかった。

午後一時まで待つてから、ジェニファーとエレオノーラの母娘は軽い食事をとった。

チャールスが帰ってきたのは、午後三時過

ぎだった。馬は七頭。牧師と保安官がついて来ていた。

屋敷を飛び出したときの激情は、チャールスの顔から引いていた。かわりに、デスマスクのような無表情を貼りつけている。

ばさっと新聞（しわくちゃになっていないから、新しく買inaおしたのでらう）をジェニファアの足元へ投げつけた。

「否定できるか？」

ジェニファアが新聞を拾いあげた。

『新町長夫人は黒人？』

大きな文字が躍っていた。

「否定はできまい。養子縁組の書類も、本来の出生証明書も、連中は押さえていた。押さえていたどころか、でかでかと掲示板に貼り出しておった」

「おお……」

ジェニファアは床に膝をついて、両手で顔をおおった。

「よくも今まで、儂を騙していたな。結婚は

無効だ。今日から、おまえもエレンもグレイ家の奴隷だ。この宣言は有効ですか？」

チャールスが、牧師と保安官を振り返った。「神の定め給えた道徳に反する婚姻は無効です。アーメン」

「俺が証人だ。所有者のいない有色人種は、捕獲した者の奴隷として登録される」

十七年間にわたって育まれてきた結婚生活は、一瞬で崩壊した。

「騙すつもりはなかったのです」

ジェニファーが弱々しく訴えた。

「曾祖母が黒人だったなんて、わたし自身も忘れていました。七つの歳に養父母に引き取られてからは、ずっと白人として育てられてきました」

「そんなことは関係ない。おまえの身体には劣等人種の血が少なくとも八分の一は雑じっている」

ジェニファーは（奴隷が主人に対してするように）ひざまずいたまま両手を胸の高さで

組んで夫を見上げた。

「わたしは奴隷に墮とされてもかまいません。でも、娘は……あなたの愛娘だけは、これまでどおりに扱ってやってください」

「三十二分の一の混血までは黒人だと、法律でも定められている。儂は、たとえ百二十八分の一でも白人とは認めんがな」

「おお。お願いします。チャーリー」

チャールスは、不意にジェニファーの腹を蹴った。

身体を折って呻くジェニファー。

「馴れなれしく主人の名前を呼ぶな」

チャールスが、母の背後で凍りついているエレンに顔を向けた。

「わかったな、エレン。おまえの白い下腹部にも、メグと同じ焼印を捺してやる」

エレンは父親の恐ろしい宣告の意味を理解できなかった。世界で一番愛している人から受けた、自分が白人ではなかったという告発。その衝撃に呆然としていた。

(嘘だ嘘だ……これは夢だわ)

エレンは唇を思い切り噛みしめた。痛かった。

(現実……違う！　でも、ママは自分がそうだと認めた？)

「そんな……恐ろしいことを！」

悲鳴をあげたのはジェニィだった。

「どうしても娘を奴隷に墮とすとおっしゃるのでしたら、せめて……せめて、ふつうに扱ってやってください」

「儂はメグを特別扱いにした覚えはないぞ」

チャールスも、最初は今の母娘と同じくらいの衝撃を受けたはずだ。しかし、町へ行って真偽を確かめているうちに冷静さを取り戻していた。処女を、それもできるだけ若い娘を犯すことに昏い悦びを覚えるこの男は、見かけは白人そっくりの少女を抱ける機会を得たことに気づいたのだった。彼にとって、それは町長選挙を失った代償にはならなかったが、わずかに傷心を癒すよすがにはなった。

ジェニィについては……自分の方針に逆らって奴隷を甘やかす妻を苦々しく思っていた。長年連れ添った夫婦の間にかよう穏やかな愛情は、彼女が妻たりえない動物だと確信した瞬間に消し飛んでいた。

「あたしが白人じゃないなんて……なにかの間違いだわ」

失神の寸前で立ち直って、エレンは断言した。

「そうよ。きっと、パパの対立候補の陰謀よ。書類なんて、偽造したんだわ」

「おまえは奴隷として定められた人種だといきなり言われても、すぐには信じられないし受け容れられないだろうな」

「信じるもなにも、嘘に決まってるじゃない」

チャールスは、数時間前までは自分の娘だった少女の言い分を聞き流して、自分の言葉をつづけた。

「だから、その身体に教えこんでやらねばなるまい。おい……」

チャールスが合図すると、デューズの部下が二人ずつ、母娘を前後から囲んだ。

「ちょ……なにするのよ!？」

羽交い絞めにされてもがくエレン。前に立った男が胸元に手を差し込んで、一気に服を引きちぎった。

「いやあああ……！」

「わめくな」

男はバシンと容赦のないピンタを張って、エレンがひるんだすきに下着まで引き裂いた。

ジェニィは最初から抵抗をあきらめている。

チャールスは、下穿き一枚にされたふたりを屋敷の外へ引きずり出した。すでに五つほどの黒い顔が、奴隷小屋と屋敷を隔てる垣根の向こうから様子をうかがっていた。

その垣根のそばに立っている大きな樹の下へ、ジェニィだけ引き立てられた。

「いやっ……縛らないで。暴れたりはしません」

抗議もむなしく、ジェニィは手首を重ねて

縛られて、樹の枝から吊るされた。足が地面に着いているのはせめてもの慈悲——ではないことを、じきにジェニイは身をもって知ることになる。

土曜日なので早仕舞いを許された奴隷も多い。あつという間に見物人の数は二十を超えた。何事かと主人に訊ねるような身の程知らずはひとりもない。ひそひそとささやき交わす声が、垣根の向こうでつづいている。奥様の裸身を見るなど恐れ多いとばかりに、目を伏せている者が多かった。

「そいつの調教は、俺にやらせてくれよ」

息子のウィリアムが申し出た。すでに巻き鞭を手に行している。

「そういえば前から、物欲しそうな顔でこいつを眺めておったな。好きにしろ」

ウィリアムは喜色を浮かべてジェニイに近づいた。下穿きの縁に指をかけて。

「フリルがひらひらの、絹のドロワースか。牝奴隷が身に着けるものじゃないな」



足元まで引き下げた。髪の色と同じ褐色がかった金色の恥毛が、傾いた陽射しを受けて燦然と輝く。

「なんてことするのよ、ウィル！」

抗議の声をあげたのはエレンだった。

「ママの下着を元に戻して。今すぐよ！」

母親に駆け寄ろうとして、エレンは腕をつかまれた。

「はなしなさいよ、デューズ」

どうしようと、目顔で雇い主に訊ねる奴隷監督。

「馬つなぎに縛っておけ」

エレンは馬をつなぐ柵のところまで、ふたりがかりで引きずられていった。ひざまずいて横木を背中にかつぐ形にされて、広げた腕を縛りつけられた。

「やめてよ。ほどきなさい。こんなことをしてただですむと思っているの！」

「ただですまないのは、おまえのほうだ」

チャールスが、こちらは恐ろしいほどの無

表情でエレンの前に立った。

「うむ。おまえも牝奴隷にふさわしくない下着だな」

心中の憤怒そのままに、一気に下穿きを引きちぎった。

「お願い、パパ。もうやめて。何かが間違ってるのよ」

目に涙をにじませて訴える少女を、チャールスは冷たく見下ろした。引き裂いたばかりの下穿きを小さく丸めて。

「口を開けろ」

エレンの目が大きく見開かれた。父の意図は明白だった。けれど、娘を素裸にして、その身に着けていた下着を口に詰めるなんて、そんなことをするなんて信じられない。

チャールスは無言で片手をエレンの下腹部に伸ばした。金色の淡い叢におおわれた、ふっくらした秘裂。その間からひっそりと覗く可憐な花卉を、太い指がうがった。

「痛い……！ やめて。抜いてちょうだい」

勝ち気な口調は消えていた。

「口を開けろ」

チャールスは繰り返して、指をさらにこじ入れてグリッとねじった。

「いやああ……むふう」

思わず叫んだ口にエレンは自分の下穿きを詰め込まれて、目を白黒させた。

「うええ……」

喉が刺激されて、吐き気がこみあげてくる。舌を動かして詰め物を押し出そうとすると、さらに奥まで押し込まれた。

「ひいいっ！」

母の鞭打たれる悲鳴がエレンの耳にとどいた。チャールスが脇に寄って、調教の光景を娘に見せつける。

樹の枝から吊るされたジェニィの尻と背中には、水平に何条もの鞭痕が走っていた。白い肌に真っ赤な線條が、残酷なまでに鮮やかだった。

「詰め物を吐き出したら、厳しい罰を与える

ぞ」

耳元にささやかれて、怯えきったエレンは、無意識のうちにこくんとうなずいていた。

「おお……もう許して、ウィル。いえ、若旦那様、どうかお許してください」

ジェニィが奴隷言葉で赦しを乞った。ウィリアムは鞭打つ手を休めて、一時間ほど前までは継母だった女の言葉を聞いている。数秒の沈黙が、ジェニィから言葉を引き出す。

「わたしが奴隷であることは、じゅうぶんわかりました。どんなご命令にも従います。ですから、どうか……もう、お赦してください」

卑屈な態度は、彼女の弱さからきたものではない。娘を救えるのであれば、鞭で打ち殺されようと縛り首で吊るされようと、喜んで運命を受け入れていただろう。ただプライドを守るだけのために、最後まで鞭打ちに耐える道もあった。

しかし、ジェニィは夫と義理の息子の性格を知り過ぎていた。彼らは、町の住民の平均

年収の何倍にも相当する貴重な財産（奴隷）を、一時の激情だけで台無しにしたりはしない。鞭打ちに屈服しなければ、さらに過酷な調教が彼女を待っている。娘への調教も、いきおい厳しくなるだろう。夫が納得する程度まで鞭打たれてから、彼の虚栄心を満足させるに足る卑屈な態度で服従を誓う。それがジェニイの計算だった。

ジェニイの誤算は、ウィリアムの年増女への執着と、父子の性的残虐さとを過小評価していたことだった。

「ほんとうに、どんな命令にも従うんだな？」

はっと、ジェニイは義理の息子の顔を見た。が、すぐに目を伏せた。言葉の裏にどんな意図が隠されていようと、彼女にできる返事はひとつしかない。

「……はい。どんなご命令にも従います」

ウィリアムは唇の端をゆがめて薄く嗤った。「では、最初の命令だ。あと二十の鞭をくれてやる。声に出して数えろ」

間違えたら最初からやり直すと、ウィリアムはつけ加えた。

「はい……」

ジェニィは弱々しく答えた。大の男が手加減無しで振るう巻き鞭を二十発も身体に受けたら、急所でなくても生命にかかわる。そこまではしないだろうと、ウィリアムの理性と慈悲を信じるしかなかった。

「こっちを向け」

ジェニィはそっと唇を噛んで、まだ無傷の側を正面に向けた。

ヒュンツ……鞭がしなりながら空間を扇状に切り裂いて。

ビシイイイ！

けっして豊満とはいえないが品よく盛り上がった膨らみに鞭が喰い入って、柔肌をこすり抜けた。

「ひいいっ！……ひとつ」

悲鳴の奥から数を押し出すジェニィ。

バックハンドの鞭が右の乳房をひしゃげさ

せる。

「あああっ！……ふたつ」

ウィリアムはジョンを鞭打ったときとは違って、打撃の寸前で腕を翻したりはしなかった。鞭は存分に肌を噛んでいた。太い線条が左右の乳房に一本ずつ刻まれた。

さら乳房を二回打ち据えてから、鞭はジェニィの細い腰に巻きついた。

パシュン……勢いを失った鞭の先端が、臍の下に当たる。それでも乗馬鞭で打たれるくらいの痛みはあった。

「いつつ……くうっ！」

ウィリアムがぐいと鞭を引き戻すと、ジェニィの身体がよじれた。鞭は腰を締めつけながら抜けていき、赤い輪を腰に刻んだ。

「むっつ……ななつ……」

同じところを三度続けて打たれて、真紅のベルトのようになった鞭痕から鮮血がしたたかった。

ウィリアムは双つの膨らみに一発ずつくれ

てから、胸から臍にかけてX字を刻んだ。乳房への鞭も含めて、ジェニィは呻くだけで悲鳴はあげなかった。

「動物の血が流れているだけあって、痛みには強いようだな。淑女なら、とっくに気絶しているところだ」

ウィリアムは鞭を逆手に持って、柄を太腿の間にえぐり入れた。

「牝犬なら、こんな刺激でも発情するんじゃないか？」

柄を後ろまで通して、鞭の腹で股間を前後にしごいた。しごきながら、じわっと両手を引き上げていく。

「くうう……」

ジェニィは爪先立ちになったが、鞭はさらに引き上げられていく。編んだ鞣革で秘裂の内側をこすられて、ジェニィの顔が苦痛にゆがむ。

やがて、ずしゅっずしゅっと軽い音が股間から漏れるようになり、だんだん音が湿り気



を帯びていく。

ズジュ……ジュリュ……

それは、過度の刺激から肉体を護ろうとする悲しい生理的反応だったが、男はそうは見ない。いや、女を辱めようとして、わざと取り違える。

「虐められて濡らすとは、とんだ淫乱牝だな」

ウィリアムは鞭を引き抜き、柄を垂直に立てて突き上げた。

ズブウッ……と、角張った柄が股間に埋没していく。

「いやあ……抜いて！」

苦痛よりも羞恥に、ジェニィは悶えた。

「それが、奴隷の口の利き方か？」

ウィリアムはさらに奥深くまで柄をくじり入れて、前後左右にこねくった。

「い、痛い……お許してください、若旦那様」

「……ふん」

ウィリアムは、あっさりと責めを中止した。鞭を握りなおして二歩下がる。

「脚を開け」

ジェニィは恐怖に顔をひきつらせた。しかし、慈悲を乞う愚は冒さなかった。

「ああ、あああ……」

ジェニィはわななく唇から絶望の声をこぼしながら、おずおずと両足を左右に広げていった。

シュウッ……蛇のように地面すれすれを一直線に奔った鞭は、獲物の脚の間でうねるように跳ね上がった。

ピシイッ……！

スイングを伴わない打撃だが、皮膚が薄く神経の密集した箇所だから痛みは凄まじい。

「きひいいいっ！」

のけぞったジェニィの喉から甲高い悲鳴がほとぼしった。背中が反りかえり、手首を重ねて縛られた両手が宙をかきむしった。

ウィリアムは、苦悶のダンスを悠然と見物している。

「何発目だ？」

冷たい声に、ジェニイの顔がひきつった。

「そ、そんな……たしか……」

「最初から数えなおせ。忘れた罰を加算して、あと三十発だ」

それが目的で、ウィリアムは鞭打ちを中断していたのだった。

「あたしは覚えてるわ。今ので十二発、残り八発よ！」

エレンが口の詰め物を吐き出して叫んだ。すっかり唾液を吸い取られて、声がかすれている。

ウィリアムは義妹だった少女を一瞥して、継母だった女に向きなおった。

「三十発だ」

「三十発なんて、ママが死んじゃう。ウィル、お願いだから……もう、やめてよ」

勝ち気なエレンがすすり泣いていた。

「ちょっと待て、ウィル」

ずっとエレンのそばで様子を見ていたチャールスが、息子を止めた。

「おまえが三十発を引き受けるというのなら、母親は八発だけで許してやるぞ」

合計で三十八発。どんどん増えていると、エレンは気づいた。

「どうしてよ、パパ？ 昨日まで、ううん今朝まで、あたしたちは仲の良い家族だったじゃない。どうして、こんなひどいことができるの？」

エレンは大粒の涙をこぼしながら訴えた。

「おまえたちが動物だからだ」

エレンは、頭を叩き割られたような衝撃を受けた。涙さえ止まってしまった。

（あたしが、ほんとうに動物だとしたら……  
奴隷だとしたら……）

パパたちの行為は間違っていない。野生の動物に自分が奴隷だと認めさせるために調教するのは当然の行為どころか、飼主の義務だ。自分が白人だなんて妄想を打ち砕くには、性的な辱めが有効かもしれない。そして、奴隷は主人に服従しなければならない。

エレンがこれまで培ってきた価値観は、かつては家族だった（と、誤って信じていた）男たちに、彼女が服従することを要求していた。

「どうする？ 母親に代わって三十の鞭打ちを受け入れるのか？」

エレンの長い沈黙に焦れて、チャールスが重ねて訊いた。

「……はい」

ゆがんだ価値観にねじ伏せられたエレンの正義感は、抑圧者を糾弾するのではなく、自身に対して拒否の言葉を封じたのだった。

「そういうことだ」

残忍な笑みを浮かべて、チャールスが息子を振り返った。

「十三から再開して二十までだ。それで許してやれ。ただし、この娘が声を出すたびに五発ずつ増やす」

「そ……」

抗議しかけて、エレンは声をのんだ。言っ

たことは必ず実行すると、少女もこの男の性格は知っていた。

「長年同じベッドに寝かせていると、家畜にも情がうつるのかい？」

憎まれ口を叩いて、ウィリアムは吊るされている女に近寄った。

「それじゃ、俺もちっとばかり手加減してやろう」

巻き鞭の根元を丸めて握りこみ、三フィート（九十センチ）の長さに調節する。

「脚を開いているよ」

右腕を大きく後ろに引いて、前から上へ思い切り振り抜いた。

バシッ……！

「ぎゃああっ……！」

花卉の奥まで鞭の先端でえぐられて、ジェニィは絶叫した。

鞭は短くなってもスイングの速度が加わって、最初の一撃よりはるかに破壊力は大きかった。扱いやすくなったぶん、狙いも正確だ

った。

「……じゅ、じゅうさん」

突っ張った四肢がガクンと弛緩した。そこへ、つぎの鞭が叩き込まれた。

「うあ……」

びくんびくんとジェニィの全身が痙攣した。悲鳴を吐き出そうにも、息を使い果たしていた。

「……じゅ、じゅうよん」

はあはあと荒い呼吸を繰り返してから、ようやく声を押し出す。

つぎの一発は、さらに厳しかった。

「この調子では、最後までもちそうにないな」

ウィリアムは鞭を巻いて脇にたずさえ、右手の中指と薬指で、六歳年上の女の股間をうがった。継母と義理の息子といっても、年齢差はそれだけしかないのだった。

「ここを懲らしめるのは、おしまいにしてやる」

二本の指を曲げて膣を搔きまわし、親指の

腹でクリトリスを転がした。

「ああっ……そこは赦して」

「感謝の言葉を忘れてるぜ」

「あ……はい。ありがとうございます」

「なにに感謝してるのか、はっきり言え」

指を半分ほど引き抜いて、親指と人差し指でクリトリスをつねった。

「ひい……股への……」

「カントだ」

クリトリスに爪が立てられた。

「ぎ……カントへの懲らしめを、おしまいにしていただいて……ありがとうございます」

「これからは、奴隷にふさわしい言葉づかいを忘れるな。股間だの陰部だの、お上品な言葉は使うな」

ウィリアムは十フィート（三メートル）はなれて立ち、巻き鞭をほどいた。

「恨むんなら、自分が産んだ娘を恨むことだな」

その言葉はエレンにも聞こえたが、意味は



理解できなかつた。

ビューン……

それまで耳にしたこともない風切音とともに、鞭が母の腹部に叩きつけられた。

ズバアッシイイン！

「ぎゃああああっ！」

水を満たした革袋を叩き割るような音と、野獣の咆哮のような絶叫とが、ほとんど同時にエレンの耳を圧した。

「ひ……！」

声を出すたびに五発の追加。一方的に追加された罰則を思い出したエレンは、歯を喰いしばって悲鳴をこらえた。成人男性が本気で鞭を振るえばどうなるか。それを目の当たりにして、エレンはおののくしかなかった。

「……じゅうろく」

エレンは、母の強靭さにも圧倒された。もしも自分が、あんなふうには鞭打たれたら――泣きわめくか失神するか。いずれにしても、最初から数えなおす口実を処刑執行人に与え

ているだろう。でも、なぜ？　なぜ、こんなにも過酷に鞭打つのだろう。中断するまでは、打ち方がもっと軽かったように思う。

（もしかしたら……）

エレンは、娘を恨めという言葉の思い出した。三十発分の苦痛を八発にまとめて与えるつもりなのだ。この処刑執行人——あるいは、若旦那様は。

エレンの意識の中で、異母兄への思慕は急速に、支配者への恐怖に変容しつつあった。

ズバアッシーイン！

「じ、じゅうなな」

母の背中が深々と切り裂かれ、鮮血が白い肌を紅く染めていく。

ふうっと、エレンの意識が途切れた。

……足の甲が地面をこする痛みで、エレンは意識を取り戻した。二人ががり引きずられていた。エレンは大樹の下に引き据えられた。母は、まだ枝から吊るされたままだった。がくんと頭を垂れ、膝が折れて体重が腕にか

かっている。

「つぎは、おまえの番だ」

見慣れているのに見知らぬ白人の男性が、エレンに告げた。

エレンは、手首を重ねて男の前に突き出した。それは屈辱的な動作だったが、奴隷ならそうすべきなのだ。

「ほう……おまえは、自分の立場をわきまえているようだな」

見知らぬ中年の男性はエレンの手首を縛ると、母から五フィートはなれた枝にロープを投げた。

エレンはロープの端を目で追って。生垣のむこうに鈴なりになっている奴隷たちの表情に気づいた。母が鞭打たれていたときの、奴隷たちの悲痛な眼差し。敬愛する奥様への同情と、チャールス父子への無言の非難。それらが消え失せていた。

腕を吊り上げられながらエレンは、心の奥から湧き上がってくるさまざまな不安を、恐

怖を、黙殺しようと努めた。

「メグ、ジョン」

チャールスは、屋敷の壁に張りつくようにして成り行きを見守っているふたりを呼びつけた。

「二日前、おまえたちはこの娘に鞭打たれたんだったな。仕返しのチャンスを与えてやる。十発ずつ、こいつを叩け」

ふたりは目を丸くしてエレンの裸身を眺め、それから互いに顔を見合わせた。ふたり（だけでなく、ほとんどの奴隷たち）にとって、白人にしか見えないジェニィとエレンは、まだ主人の側にいる人間だった。人間様の身体に危害を加えるなんて、恐れ多い。しかし、グレイ家の当主、奴隷の所有者が、それを命じている。ジレンマだった。

「わかりましたです。喜んでやらさせていただきます」

先に返事をしたのは、意外にもメグだった。「おまえたちに巻き鞭は扱えまい。これを使

え」

チャールスが乗馬鞭を手渡した。それはエレンがふだん使っていたものより長く、それだけ打撃力が大きい。

「おっばいに十発だ。右と左、代わりばんこに叩け」

チャールスは、エレンの背後から両方の乳房を揉んだ。

「あ……」

ぴくんとエレンの身体が震えた。男性に乳房をさわられたのは、これが二回目だった。こんなふうに揉まれるのは初めてだった。

「まだ熟れる前といったところか」

上下左右と指の位置を変えながら、品定めでもするように丹念に揉みたてた。そして。

「い、痛い……」

戸惑いと恥じらいに染まっていた頬から血の気が引いた。チャールスの手は乳房を揉むのではなく、握りつぶしにかかっていた。リングを三分の一だけ切り取って伏せたような

少女の乳房が、レモンのように絞り出される。

「鞭打たれて腫れたら、この貧弱なおっぱいも姉と同じくらいになるかもしれんぞ」

これまではメグとエレンの姉妹関係を絶対に認めようとしなかった男が、わざわざそれを口にする。

「うれしいだろう？」

「……………」

奴隷なら主人に迎合してお礼まで言うべきだと、頭では理解していた。けれど、エレンのプライドがそれを許さなかった。

「おまえは昔から強情だったな。せいぜい儂を愉しませてくれよ」

チャールスはエレンの身体をはなして、彼女の異母姉に向かって顎をしゃくった。

「ええい！」

黄色い気合を發して、メグが鞭を振るった。ペチン……気の抜けた音だったが、エレンの受けた衝撃は大きかった。とにかく痛い。転んで石に乳房をぶつけたことがあるが、それ

よりもずっと痛かった。と同時に。奴隷としてこき使っていた異母姉に鞭打たれるという屈辱。

「なんだ、その打ち方は。本気でやらんと、おまえもそこに吊るすぞ」

チャールスが罵声を浴びせた。

メグはすまなさそうな目をエレンに向けて。大きく腕を振りかぶった。

「ええい！」

ヒュン……バシン！

「ぐ……」

乳房から脳天まで激痛が走り抜けた。息が詰まって、悲鳴もあげられない。打たれたところを焼かれているような錯覚が、あとに残った。

「右のおっぱいだ」

バックハンドの鞭が乳房をひしゃげさせた。

「かはっ……」

エレンはのけぞって喘いだ。

左、右と続けざまに打たれて、エレンはよ

ろめいた。ロープに引き戻されて、肩がグキッ  
と鳴った。

(もう、駄目。とても耐えられない……)

ヒュン……バシン！

「うああああっ……！」

吐き出した息が大きな悲鳴になった。それを  
エレンは恥じた。

(ママは巻き鞭で叩かれても、こんな大げさ  
な声は出さなかった)

母親の我慢強さに感心すると同時に。メグ  
の悲しそうな表情の意味を悟った。もしもメ  
グではなく力の強い男性に、乗馬鞭ではなく  
巻き鞭で打ち据えられていたら、こんなもの  
ではすまない。メグは妹である自分をかばう  
ために、鞭打ちを引き受けたのではないかし  
ら。だから、最初の一発は手加減していたん  
だ。ううん、今だってほんとうに本気ではな  
いのかもしれない。

ヒュン……バシン！

「ぐっ……」



エレンは悲鳴を噛み殺した。それが、メグの配慮に報いる唯一の方法だと思った。

最初の一発は数えてもらえず、全部で十一発の鞭を乳房に受けた。リンゴのように真っ赤に腫れあがり、虫に喰われたようにどす黒い打痕をちりばめた乳房は、チャールスが期待した(?)ように大きくなってはいなかった。乳房全体が燃えるように熱く、心臓が脈打つたびにずきずきと痛んだ。

メグから乗馬鞭を引き継いだジョンは、尻を叩くように命じられた。

「背中も叩かせてください。僕だって叩かれたんだから」

「駄目だ。手元が狂うと背骨を傷つける」

にべもなく拒絶されて、ジョンは頬を膨らませた。彼には、手加減するつもりは微塵もないようだった。

背中を叩く危険性は、エレンも知っている。だから非力な彼女でも、背中は水平か斜めに鞭打つようにしていた。それでも相手を半身

不随にしたり殺してしまう恐れが皆無というわけではない。そのときはそのときと軽く考えていたけれど——自分が鞭打たれる側に立たされてみて、ぞっとした。

ざらっと尻を撫でられて、エレンは思いから引き戻された。ジョンだった。片手で尻を撫でながら、乗馬鞭を大胆にも尻の間に差し込んできた。その奇妙な感触に、エレンは鳥肌が立った。

「やめてよ。お尻を叩くように命令されたんでしょ。さっさと叩きなさいよ」

「ほう。この娘は撫でられるより叩かれるほうを好むのか。ジョン、願いをかなえてやれ」

チャールスは、ジョンの淫らがましい行為を咎めなかった。

ざっと、ジョンが後ろに下がる気配。ぴたぴたと、乗馬鞭の先端が尻に当てられた。

ヒュン……バッチイイン！

「うあっ……！」

お尻なら強く叩かれても耐えられる。折檻

でぶたれた記憶が、エレンにそう思い込ませていた。けれど、スカートの上から平手で叩かれるのと、素肌を鞭で叩かれるのでは、痛さが比べものにならなかった。まったく別の懲罰だった。

ヒュン……バッチイイン！

「ぐ……」

それでも、息が詰まるほどではないし悲鳴も出ない。それに乳房と違って、叩かれているうちに感覚が麻痺してきて、最後の何発かは痛みも薄れた。

「今ので十発だ。おまえの役目は終わった」

声をかけられて、ジョンは残念そうにエレンからはなれた。

「仕上げの十発は、俺が直々に打ってやろう」

チャールスがエレンの前に立った。すぐには巻き鞭を手にはせず、おのれの血が半分は流れている少女をしげしげと眺めて。ついつと乳房に手を伸ばした。掌に包んで、弾力を愉しむように何度も揉んだ。

「メグのぶよぶよしたおっぱいより、ずっと手ごたえがあるぞ」

鞭打たれて腫れた乳房は、軽く触れられるだけでも痛かった。けれど、凄絶な苦痛を体験したあとでは、我慢できないほどではない。

「いつの間にか、生意気なものまで生やしおって」

チャールスの手が下腹をざりざりとこすって、股間の叢をつまんだ。

また乙女の深奥をうがたれるのかと、エレンは身体を硬くしたが、そこは表面をちよっとくじられただけですんだ。

チャールスは十フィートはなれて、巻き鞭を手を取った。

「脚を開け」

その命令に、エレンはおののいた。股間を鞭打たれるのだと判断した。

(きっと、ひと打ちで泣き叫んで……失神するかも)

ピシリ。鞭が地面を叩いた。

「脚を開け。三十発の鞭を望んだのは、おまえ自身だぞ」

それは違う。エレンは内心で反論したが、口には出さなかった。おそるおそる、一フィートほど足を開いた。

「もっとだ」

もう一フィート。身体が沈んで、肩に体重がかかった。手首を交差させられているので、吊られているロープにすぎることもしかない。脚で体重を支えようと踏ん張って、太腿の筋肉が小刻みに震えた。

チャールスは腕を横に広げた。

シュンッ……

鞭が奔った瞬間、エレンは目を閉じた。

パッシイン！

「きゃああっ……！」

打たれたのは股間ではなく腿の内側だった。それでも、叫ばずにはいられない痛さだった。

シュンッ……パッシイン！

反対側の腿も打たれた。膝が砕けて腕が引

っ張られた。

「きゃあ……！　ぐっ……」

鞭打たれた悲鳴に、肩の痛みを訴える呻きがつづいた。

肌が裂けるのを防ぐためか、痛みに馴れさせないためか、チャールスは同じ個所は打たなかった。二度目は膝の近くに鞭を巻きつけて少女を呻かせ、つぎは鼠蹊部すれすれに鞭を当てて盛大な悲鳴を引き出した。

「ひぎゃあっ……！」

少女の悲鳴を伴奏にして八発を打ち終わると、チャールスは後ろを向けと命じた。

エレンは、ほっとした思いで命令に従った。娘に甘い父親のイメージを心から拭いきれていない少女は、奴隷に対する主人としての、この男の酷薄さをじゅうぶんに理解していなかった。

ビュウン……！

その凄まじい鞭の唸りに身をすくませた瞬間。鋭利な刃物で切り裂かれたような、焼け

た鉄杭を押しつけられたような、形容しがたい激痛がエレンの背中を真っ二つに割った。

「が……！」

数秒、エレンは全身を硬直させて顎がはずれそうなほど口を大きく開けた。

「ぎゃああああーっ！」

凄絶な悲鳴が吐き出された。

(ママは……こんなのを五発も喰らったの!?)

「おまえも、母親に似て打たれ強いな。気を失わないとは、たいしたものだ」

それは感心している声ではなかった。少女をからかって愉しんでいるのだった。

「最後の一発だ。儂を失望させるなよ」

気を失うなという意味なのだろうと、エレンはぼんやり思った。あと一発で赦してもらえるのだと、気力を振り絞った。

ビュウン……！

最初と同じだった。風切音は聞こえるのに、身体を鞭打たれる音は聞こえなかった。凄ま

じい衝撃だけが背中を切り裂いた。

「ひぎゃああっ……！」

喉の奥から悲鳴を吐き出しながら、エレンはかすかな安らぎを感じていた。

（終わった……）

これからは粗末な食事と衣服しか与えられず、厳しい労働に追いまくられる日々がつづくのだろうけれど。今はもう、これで赦してもらえる。

「さて……口の詰め物を吐き出した罰が残っていたな」

きゅっと心臓が縮んだ。すっかり忘れていたけれど。もう。じゅうぶんに罰は受けていると思った。

「お願いします。どうか、もう赦して……鞭は、いや」

「わかっているとも。すなおで従順な奴隷は、やさしく扱ってやる。なに、罰と言ってもたいたものではない。これひとつだけだ」

チャールスは、ポケットに忍ばせていた洗



濯バサミを取り出した。

ほう……と、エレンは安堵の息を漏らした。洗濯バサミでなにをされるのか見当もつかなかったが、そんなもので与えられる苦痛など高が知れている。

「ありがとうございます」

奴隷ならここで感謝の念を述べるべきだと、そう考えるだけの余裕が生まれた。

「ふふん……」

チャールスは片膝をついた。左手でエレンの淡い金色の叢をかき分けて、秘裂が始まっている部分を、指の間にはさんだ。

「え……？ ひっ！」

股間にひそむ小さな皮の盛り上がりから、なにかが無理やりに押し出されるような感触。によるんと皮がめくり上げられた、はっきりした痛覚。それでいて、おしっこが漏れそうになる快感をともなっていた。

皮の盛り上がりの中に鋭敏な肉の核が埋もれていることを知らないエレンでも、その

快感は知っていた。木登りをしていて、そこに枝の切り口が当たると気持ち良くなることを発見してママに教えてあげて、お尻をぶたれた。

しかし、場違いな快感に翻弄されていたのは数秒だけだった。洗濯バサミが近づいてきて、下腹部に隠れて……

「いやああああっ……痛い、痛い！」

鞭打ちとは異質の、もっと鋭利な激痛が股間の一点で炸裂した。

「ううううう……ひぎいい！」

痛みから逃れようとして腰を引きかけて、エレンはいっそうの激痛に襲われた。チャールスは、洗濯バサミを持ったままだった。

「痛い、痛い……取って、これ取ってよ、パパ！」

奴隷風情が命令がましい口を利き、馴れなれしくパパと呼んだことを、チャールスは咎めなかった。彼には、あらかじめ定めているシナリオがあった。

「そんなに痛いのか？ 取ってほしいか？」

「痛いよ。取ってよ」

少女の切迫した哀願を無視して、チャールスが立ち上がる。

「どうしてよ。ほっとかないで。取って……  
お願いだから」

そこで、エレンの声が途切れた。自分の言葉づかいが奴隷にふさわしくなくて、それで願いを聞いてもらえないのだと気づいた。

「お慈悲ですから。どうか、この洗濯バサミを取ってください」

チャールスは、呆けたように見物しているジョンに歩み寄って、まだ胸に抱いていた乗馬鞭をもぎ取った。それで、洗濯バサミをチョンチョンと小突いた。

「ひいい……お願いします。もう、虐めないで……ください」

「洗濯バサミを取ってほしいのか？」

チャールスは、ゆっくりと罨を閉じにかかった。

「どうしてもと望むなら、この鞭で叩き落としてやろう。どうだ？」

「いやあ……！」

反射的に叫ぶエレン。

「いやなら、儂はかまわんぞ。いつまでも、洗濯バサミを着けている」

エレンは戦慄してうつむいた。この鋭い痛みは鞭と違って、ずっとつづいている。今にも気絶しそうなのに、あとからあとから湧いてくる激痛が、それを許してくれない。

あの慎み深いママを獣のように泣き喚かせたのだから、股間を鞭打たれる痛みは、これよりも激しいのだろう。

(でも、一瞬だけ我慢すれば……)

この、いつまでもつづく鋭い痛みから解放される。

迷いに迷ったあげく。エレンは顔を上げた。「洗濯バサミを……鞭で叩いてください。お願いします、ご主人様」

心ならずも、肉体を虐めてほしいとみずか

ら懇願してしまった。

チャールスがほくそ笑んだ。

ただ肉体に苦痛を与えるなら、この一幕は不要だった。徹底的な屈辱を味わわせてやらないことには、十五年以上も騙されてきた腹の虫が癒えない——というのは、母娘へ投げつける口実に過ぎない。牝奴隷、ことにエレンのような成熟前の少女をいたぶるのが、この男の病的な嗜癖なのだった。

「奴隷の切実な願いを聞き届けてやらぬほど、僕は無慈悲な主人ではない」

勝手なことをほざいて、チャールスは長い乗馬鞭をかまえた。

「もっと脚を開け」

今日だけで何度目になるのだろう。女に辱めを予告する命令を、チャールスが口にした。

エレンは、腿を打たれたときと同じように二フィートも脚を広げた。

ビュンッ……！

ぎゅっと目を閉じた直後。

バッシイインン……！

足が浮くほどの打撃が股間を襲った。

パチンッ！

洗濯バサミが弾け飛び、最後の瞬間に肉芽の先端をしたたかに噛んだ。

「ぎぎゃあ……はっ……」

悲鳴は途中で切れた。股間に生暖かい液体が伝うのをおぼろに感じながら、エレンの意識は闇にとざされていった。

「ボス。食事の支度ができたと、さっきから女中が言ってますが？」

いつか、陽は平原の彼方に没しかけていた。食事にはまだ早い時刻だったが、チャールスたちはランチもとらずに町を駆けまわっていたのだ。

チャールスは、樹の枝から吊るされている二つの白い裸身を眺めた。

「折檻小屋へぶちこんでおけ。続きは飯のあとだ」

二体の牝奴隷を下ろしにかかった男たちを、

ウィリアムが止めた。

「こいつのケツは、まだ使ったことがないんだろ？」

年嵩の牝奴隷の尻をぴしゃんと叩いた。ジェニィは身じろぎしたが、まだ意識を取り戻していない。

「あたりまえだ。女房を相手に、そんな背徳的な真似ができるか」

「それじゃ、こいつは馬つなぎに縛りつけていてくれ」

「初物を奪われたか」

「親父こそ、ガキの初物を独り占めじゃないか」

居合わせた部下たちが苦笑した。しかし雇主に辟易したふうではない。

「心配するな。おまえたちにも分け前はやるよ」

ウィリアムが請け合おうと、彼らは嬉しそうにうなずいた。

### 3. 白人から奴隷に

樹の枝から下ろされたエレンは手首を縛られたまま、折檻小屋へ放り込まれた。小屋と  
はいうが、太い丸太を頑丈に組み合わせて作られた倉庫の趣きだった。床板は張られておらず、剥き出しの地面の一部に藁が敷かれていた。

その藁の上で、エレンは意識を取り戻した。  
(ここは……?)

薄暗い小屋の奥に、黒い塊が浮かんでいた。エレンは息をのんだ。それは裸の男だった。手首と足首をひとまとめに括られ、捕獲された動物のように吊るされている。股間に大きな革袋がぶら下がっていた。

「エレオノーラお嬢さん……ですか？」

男から声をかけられて、エレンはぎょっとした。革袋から男の顔に視線を移した。その中年の奴隷に見覚えはなかった。



「いったい、どうして？ それに、その……  
裸でいらっしゃるのは？」

「あたしはエレオノーラでもお嬢様でもない。  
奴隷のエレンよ」

吐き捨てるように言ってから、ちっとも説明になっていないと気づいた。

「ママのひいお祖母様だったかな。その人が黒人だったんですって。だから、ママもあたしも黒人なの。あなたと同じように、グレイ家の奴隷なのよ」

要点を簡潔に述べる話し方は、無知な奴隷に語りかける主人のそれだった。

「こりゃまた、驚いた。へええ！」

男は無遠慮にエレンの裸身を見下ろした。乳房と太腿に刻まれた鞭痕には、とっくに気づいている。

「それで、さっそくの折檻てわけですかい。  
お気の毒にね」

ちっとも気の毒そうではなかった。さんざっぱら高慢ちきに振る舞ってきた報いだ。す

こしは俺たちの痛みをわかったかね——と、  
そこまで言わなかったのは、彼もまだ困惑し  
ているのだろう。

エレンは男から顔をそむけた。小屋を見ま  
わして、言い知れない恐怖を覚えた。鞭打ち  
ではすまされない重い罪を犯した奴隷や、仲  
間同士で諍いを起こした奴隷、手癖の悪い奴  
隷などを懲らしめるための折檻小屋。それは、  
屋敷からも奴隷小屋からもはなれた荒野に建  
てられていた。通りかかったことはあるが、  
中を見るのは初めてだった。

間仕切りのない、広く陰鬱な空間。壁に掛  
けられた無数のロープや鎖と大小の枷。その  
下に置かれた火壺と焼き鏝。奴隷を縛りつけ  
るために使うのだろうか、土間には何本もの  
杭が打ちこまれていた。目につく調度品は懲  
罰のための道具ばかりで、ベッドもテーブル  
もなかった。大小の丸太は何に使うのか見当  
がつかなかったし、小屋の隅に置かれた桶は、  
湯を張って身体を洗うには小さかった。

じょろじょろじょろ……ちいさな水音が、  
上のほうから聞こえてきた。

(まあ……！)

エレンは目を丸くして男を、正確には革袋を見上げた。放尿しているのだった。革袋は男の器官をすっぽり包んで、口元を紐で縛ってあった。つまり放尿して中身が増えていくにつれて、根元に負担がかかる仕掛になっていた。

女の人を吊るすときは、どうするつもりなんだろう。そんな疑問が頭に浮かんで。はっと気づいた。小屋の隅へ行って、水汲みに使うには大きすぎる桶を覗きこんだ。中身は空だったが、異臭がしみついていた。

テーブルで食事をとることもベッドで寝ることも許されないばかりか、トイレで用を足すことすら禁じられた環境に放り込まれたのだ。

(そうか……あたしは家畜なんだ)

理屈としてではなく、生活の実感に裏打ち

されて、エレンはつくづく思い知った。

人間になにをされても、家畜には文句を言う権利がない。たとえば……

(メグのように?)

異母姉の顔が思考の片隅をよぎった。牝奴隷にメグを産ませたのは、その持主だ。そしてメグの処女を奪い、その証の焼印を下腹部に刻んだのも、同じ人間だった。

「おまえの白い下腹部にも、メグと同じ焼印を捺してやる」

チャールスの声が脳裡によみがえった。焼印の紋様も鮮明に思い出した。横長のハート枠に囲まれた S L A V E の文字。主人に抱かれた証。

「まさか……そんな。そんなこと、パパがするはずがないわよ」

震える声で、エレンは自分にささやいた。  
(違う。あの人はパパなんかじゃない。あたしの持主、ご主人様なんだ)

ご主人様に逆らってはいけない。人間が家

畜を淫欲の対象にするなんて、褒められたことではないかもしれないけれど、指弾されるほどの不行跡でもない。そう……家畜を妻にするほどには。

エレンは自分で自分をどんどん追いつめていくのだった。

チャールスとウィリアムの父子が二人きりの侘しいディナーを終えて庭に出ると、デュースとその部下たちが、若主人に命じられた道具立てを準備して待っていた。

「ご主人様、エレンは無事なのでしょうか？」

乾いた血を全身にこびりつかせたジェニィが、娘の安否を訊ねた。

「おまえは、俺たちを愉ませることだけ考えていればいいんだ」

突き出した尻をぴしゃっと叩くウィリアム。ジェニィは足首をロープで左右に引っ張られて尻を突き出した形で、広げた腕を馬つなぎに縛りつけられていた。

「蚯蚓腫れがボコボコして、触り心地がわるいな。全体が腫れるまで鞣してやるべきだったかな」

残照に照らされてピンク色に染まった尻を両手で撫でまわすウィリアム。

「まったくもって、おまえはでかいケツが好みだな」

「しょうがないだろ。親父の仕込みがよかったんだ」

●五歳の誕生日にウィリアムが父親からもらったプレゼントは、二十五歳の牝奴隷だった。従順で豊満で性技に長けていた。以来、彼は年上の女を好むようになったのだった。

「アナルまでは教えなかったぞ」

父親が苦笑した。

「だって、前の穴は親父の使い古しじゃないか」

ウィリアムは注射器の化け物のような器具を手を取った。牛馬に使う浣腸器だ。それで、桶に入れた腐りかけの牛乳を吸い上げた。

何をされようと黙って受け容れるしかない  
と観念しているジェニィは、冷たい嘴管を肛  
門にあてがわれても、ぴくっと身体を震わせ  
ただけだった。しかし、その太い先端を押し  
込まれかけると、悲鳴をあげた。

「ひいい……痛い！ 無理です、そんな太い  
物、とてもはいりません」

「はいるとも」

腕に力をこめて押し込むウィリアム。ずぶ  
っと、嘴管がジェニィの体内に埋没した。

「くう……熱い！」

痛覚と熱覚が同時に刺激される。

「いま冷ましてやる」

ウィリアムは左手でシリンジをさらに押し  
つけながら、プランジャに体重を乗せて押し  
た。一ポイント（約五百ミリリットル）ほど  
の腐りかけてヨーグルト状になった牛乳が、  
ジェニィの腸に流し込まれた。

同じ作業がさらに三回繰り返されると、ジ  
ェニィの腹は妊娠しているみたいに膨れてい

った。

「ぐうう……お、おなかが……」

注入されているときから、ジェニイは猛烈な腹痛と便意に襲われていた。けれど人前で排泄するなど、獣や家畜ならいざ知らず、人間の女性にできることではない。

永遠に我慢できるはずがないとわかっているけど、ジェニイは肛門を必死に引き締めて破局の瞬間を先へ伸ばそうとつとめた。

「あううう……」

陽が落ちて冷たくなってきた風に晒した裸身に脂汗を浮かべながら、ジェニイは無意識のうちに腰を左右へ振り立てた。

垣根越しに見物している奴隷は、もうひとりもいなかった。女中や家僕も屋敷の中で息をひそめていた。馬つなぎのまわりに集まっているのは、デュースたち奴隷監督と、その配下ばかりだった。男たちはにやにや嗤いながら、尻振りダンスを鑑賞している。

やがて。十五分も経っただろうか。



びゅるっ……と、白い筋がジェニイの尻から迸った。

ぶっしやあああ……白い筋はたちまち太い奔流となって空間に弧を描いた。ぼたぼたと、茶色の塊がいくつも芝生に転がった。

ヒュウヒュウと、男たちが口笛を吹き鳴らした。

「いやあ……見ないでえ！」

ジェニイは泣きながら訴えたが、耳を貸す男などいない。

奔流はやがてせせらぎに細り、最後には肛門から雫がしたたり落ちるだけになった。

ウィリアムは別の桶から浣腸器に水を吸い上げて、ひそやかに涙をこぼしている牝奴隷の腸内洗浄にかかった。

ジェニイには、もう便意をこらえる気力がない。最初の注入を終えるとすぐに、薄く茶色味を帯びた水を噴出してしまった。

二度目の洗浄で、肛門から吐き出される水は透明になった。ウィリアムは男たちに命じ

て、ジェニィの背後にボロ布を敷かせた。それは母娘から剥ぎ取った衣服だった。

半日前までは義理の息子だった青年に犯されるのだとは、覚悟してあきらめているジェニィだった。冷たく粘っこいものを肛門に塗り込められても、軟膏のたぐいだろうとしか思わなかった。

近親姦と同様に『ソドムの罪』もまた神の教えに背くものだという事くらいは知っていたが、それが具体的にはどういう行為なのかを、ジェニィは知らない。『前』とか『使い古し』とかいう父子の会話から、まさかと思わないでもなかったが、自分の考え過ぎだろうとさえ思っていた。

しかし。欲望に熱く滾り勃った陰部（奴隷らしく表現するならコック？）を肛門に押しつけられては、理解しないわけにはいかなかった。

「そこをそんなふうに使っては、いけません。天罰がくだされます！」

侵入を拒もうとして、ジェニィは肛門に力をいれた。

ウィリアムは牝奴隷の背中におおいかぶさって、左手で乳房を驚づかみにした。

「主人のすることに文句を言うな。口を閉じてケツの穴を広げろ」

もぎ取られそうなほど乳房をひねられても、ジェニィは暴れ馬のようにもがいて背徳の門への侵入を拒んだ。

「こんなこと……野生の獣でもしません！」

「おまえは主人を獣だと言うのか？」

ひねられた乳房が、さらに下へ引っ張られた。それでもジェニィは抵抗をやめず、みずから乳房を虐めるように全身を揺すった。

「ぎひい……けっして、そんなことは。お慈悲ですから……」

「おまえの娘に代わりをつとめさせてもいいんだぞ」

ぴたっと、ジェニィの動きが止まった。

「おお……むごいことを。わかりました、お

好きなようにしてください。地獄にはわたしが落ちます。ですから、どうか娘には……」

「約束してやるよ。俺はエレンには指一本触れない」

ふうっと、ジェニィの全身から力が抜けた。ところを、ウィリアムの剛直が貫いた。

めりめりっと、排泄孔を押し割られる音をたしかに聞いたと、ジェニィは信じた。

「うがはっ……ああ……！」

口を大きく開けてのけぞり、ジェニィは灼けつく激痛に耐えた。

「奥は柔らかいが、締りは悪いな」

ウィリアムが不満そうにつぶやく。

「アヌスとは、そういうものだ。だから、何十分でも愉しめる。逝くときはドアの裏側を使え」

息子の教育に熱心な父親もあったものだ。括約筋の締りを利用しろと、適切だがとんでもない助言をする。

「そう長くも遊んじゃられないんだろ。明

日は早起しなくちゃならない」

ウィリアムは逸物を三分の二ほども引き抜いて、性急なピストン運動を始めた。

「なるほど……入口は凄く締まる！」

射精の瞬間にはまた深々と貫いて、ウィリアムは欲望を腸の奥深くに吐き出した。

「あとは、おまえたちで好きにしろ」

ウィリアムはズボンを穿きながら、取り巻いている男たちに声をかけた。

「時間が余れば、部下たちも遊ばせろ。どの穴を使ってもかまわない。そうだな、親父？」

うおおっと、奴隷監督たちが歓声をあげた。

ああ……と、声にならない悲鳴を漏らして。ジェニィはうなだれた。自分でも忘れていた過去をあばかれ、奴隷に墮とされ、母娘そろって過酷な折檻を受け、あまつさえ神の教えに背く行為を強制されて。慈悲を乞う気力すら、ジェニィには残っていなかった。

それでもまだ……生き地獄の初日は終わっていないのだった。

ほとんど闇にとざされた小屋の片隅に、エレンはたたずんでいた。敷き藁に座ると鞭打たれた尻が痛み、藁の先端が太腿の腫れをつついた。壁にもたれかかると、切り裂かれた背中の傷口に丸太のささくれが突き刺さった。  
(あたし……ほんとうに……メグと同じ扱いを受けるのだろうか？)

さまざまな想念は、いつもそこに戻ってくる。そんな目に遭わされるくらいなら、今すぐ死んでしまいたい。けれど、自ら命を絶つことは神様が禁じていらっしやる。それほど信仰心の篤くないエレンだが、死への恐怖と神の定めた禁忌を同時に踏み越える蛮勇は持ち合わせていなかった。

(あたし……どうすればいいんだろう？ どうなるんだろう？)

何十回目かの問いを心にめぐらせたとき。エレンは足音を聞きつけた。折檻小屋に設けられた小さな窓から屋敷の方角をうかがった。

チャールスとウィリアムが、こちらへ歩いてくるのが月明かりの中に見えた。いや、もうひとり。素裸の女性が、首に巻かれた縄で引き立てられている。メグだった。縛られているのだろう、手を後ろにまわしていた。

その取り合わせの奇妙さが、エレンを戸惑わせた。

一行はゆっくりと近づいてきて。角材を組み合わせた格子扉が開かれた。ウィリアムが、持ってきたランタンの灯を小屋のランプに移した。

「待たせたな。おまえの番だ」

チャールスが背後にまわって、エレンの手首を扼しているロープをほどいた。

「あたしの番って……？ ママは、ママはどうなったの？」

エレンは押し倒された。

「奴隷監督たちと楽しく遊んでるよ」

馬乗りになったウィリアムが『遊んで』を強調して言った。

「な……」

エレンは絶句した。

ウィリアムに両手をつかまれて、エレンは振りほどこうとして身をもがいた。

「あばれるな」

ずんっと体重を腹にかけられて。エレンの腕から力が抜ける。土間に打ちこまれた杭に四肢をX字形に開いた姿で縛りつけられるあいだ、エレンはまったく抵抗しなかった。

（だって……縛られてたほうが、ましよ！）

ランプの薄明りの中でぎらぎら光る男たちの目の色に気づいて、エレンは自分の運命を悟っていた。手足が自由でいて、父親に犯されても抵抗しないなんて……それでは、彼女自身が父親の行為を受け入れていることになりはしないだろうか。抵抗を封じられて犯されるのなら、神様だって赦してくださるかもしれない。

エレンは腰を持ち上げられて、直径が二フィート（六十センチ）もある丸太に乗せられ



た。

「くう……」

杭に縛り付けられた四肢がぴいんと引き伸ばされてエレンに新たな苦痛を与えたが、反面、傷ついた背中が浮き上がって、そちらの痛みは薄らいだ。

苦痛はともかく。大股開きの股間を高く突き出した姿勢は、エレンに羞恥をよみがえらせた。抵抗を封じられているのだから、何をされても仕方がないと――割り切れるものでもない。

「やだ……こんなの、恥ずかしい。見ないでよ……やだったらあ！」

チャールスもウィリアムも、エレンの懇願には一顧も与えない。ウィリアムが壁際へ行って、小さな棚をごそごそかきまわした。

「いや、それはいらん」

「趣味が変わったのかい？」

ウィリアムは剃刀とシャボン容器を棚に戻した。

「試してみたいと思っていたことが、ひとつあった。メグの毛は短くて無理だったが、こいつのは薄くても長い」

「短くしたのは誰なんだい？」

ウィリアムの言葉は、家長への口の利き方ではなく、淫靡な愉しみを分かち合う共犯者のそれだった。

肩をすくめて。チャールスはマッチを取り出した。

シュボツ……小さな炎で、身動きできない少女の股間をゆっくりと撫でた。たちまち、白い肌の上で金色の淡い叢が燃え上がった。

「ひゃあああ……熱い！ 消してよう！」

叢がチリチリと燃えて、毛の焦げるいやな臭いがあたりに立ちこめた。

「やめて……パパ、赦して！」

悲鳴が消えるまでに、股間の山火事も消えていた。叢は燃え尽きて、秘裂も突起を包むフードも、余すところなく男たちの目に晒された。白い肌には点々と黒い燃え滓が散って

いたが、とくに火傷した様子はない。

「なるほど。炎は上へ昇るから、一瞬なら大丈夫ってわけか」

ウィリアムが、感心したように言った。

「しかし、この娘は大丈夫じゃなさそうだけ。真っ青になって震えてやがる」

「ふむ……」

チャールスはマッチの軸を投げ捨てて、その指でエレンの秘裂をえぐった。

「い、痛いっ……」

乾ききった穴を乱暴にくじられて、エレンは小さな悲鳴をあげた。実の父親に凌辱されているという背徳の思いが、大声を控えさせていた。

「なるほど。初夜の営みどころではなさそうだな」

エレンに確実に理解させて恐怖をあおるつもりか、わざと上品な言葉を選ぶチャールス。「メグのときのように、泣き叫ぶのを力づくで犯すのも面白いが……こいつは、ずいぶん

と大切に育ててきたからな。最後までやさしく扱ってやろう」

その言葉を聞いて、エレンは安心するどころか不安をつのらせた。果たして。

「はいつて来い、メグ」

それまで小屋の外で待たされていた娘が、ひっそりと姿を現わした。

「おまえの妹が心地よくコックを嵌められるようにしてやれ」

メグは首の縄を引かれて、X字形に縛りつけられている妹の股間にひざまずいた。手は後ろで鎖に巻かれている。初潮を迎えて半年もしないうちに処女を奪われ、チャールスの子を孕みそうにないと見切りをつけられてからは客人の慰み者にもされて、さまざまな性技を仕込まれてきた娘は、主人の言葉の意味を完璧に理解していた。それだけに、恨みがましい目で主人を見上げた。

「それとも、妹にも地獄の貫通式を味わわせてやるか？ そんな薄情な姉には、それなり

の罰を与えてやるぞ」

メグは悲しそうに目を伏せて、妹の股間にすっと顔を近づけた。腕を絡めた鎖が、カチャリと鳴った。

吐息を股間に感じて、まだエレンには何が起きようとしているのかわからなかった。性器に口づけるなど、彼女の想像の埒外だった。

ピチョ……ぬめっとした弾力のある生暖かい感触に秘裂を割られて、エレンは戸惑った。チャールスのごつごつした指と違って不快ではないが、なんとなくおぞましい感触。

弾力のある異物がぐにゅっと動いて、秘裂に埋もれた花卉の中にまで侵入してきた。と同時に、太腿に触れたのは――メグの頬だった。エレンは、自分が何をされているか理解した。

「やめて！ 汚いわ……」

エレンは半狂乱で叫んだ。

「そんなとこ、舐めないで。恥ずかしい、汚

いわよ」

エレンの声を無視して、舌は花卉の中を掻きまわした。

(……………?)

きゅんっと、腰の奥に不思議な感覚が生じた。けれど、強い禁忌感がそれを打ち消した。

「おい、妹が汚いと言ってるのだぞ。きれいにしてやれ」

エレンの言葉を逆手にとって、チャールスがけしかける。

メグは主人の言葉に従順に従って、ふっくらした土手と花卉のすきまに舌を這わせた。舌をぐっと突き出して、溝を舐めあげる。

「汚れを妹に見せてやれ」

メグは舌を突き出したまま妹の顔に近づけた。薄明りの中に浮かび上がる濃いピンク色の肉片。その先端にクリームチーズのような白い半固形状の物がこびりついていて、つんと鼻をつく臭いも腐りかけのチーズに似ていた。

それが自分の股間にひそんでいた垢の塊だと気づいて、エレンは顔をそむけた。

「やだ……汚いっ！」

「汚いものを吐き捨てて、小屋を汚すんじゃないぞ」

メグは舌を口中に戻すと、ごくんと喉を下させた。

(うえ……)

見ているだけで、エレンは吐き気をもよおした。汚いところを舐めるだけでなく、そこに溜まっていた垢を食べるなんて。

(でも……)

もしも主人の命令にさからって吐き捨てたりしたら。メグの股間を舐めて垢を食べると、洗濯バサミとか鞭とかと……自分なら、どっちを選ぶだろう。

ぺちよ……ふたたび股間に舌を這わされて、エレンは自らへの問いに答える時間がなくなった。

「唾で濡らせばいいってものではないぞ。感

じさせてやれ」

メグの舌が、秘裂に沿って上へ動いた。

「あ……」

秘裂の合わさっているあたりにある小さな皮の隆起を刺激されて、エレンの腰がぴくんと跳ねた。

メグの鼻が下腹部に押しつけられた。コリッと皮を噛まれる。噛むというより歯を使って皮を押し下げている。

によると、皮に埋もれている突起が剥き出される感触。

「ひゃんっ……！」

チャールスの指で剥かれたときよりも、痛みは小さかった。

「うあ……やめ、それ……やめて」

突起の先端をチョンチョンとつつかれて、腰から背筋にさざ波が奔った。おしっこの漏れそうな感覚が一気に高まる。腰の奥深くに熱が溜まって、それがじわつとにじみ出てくるような錯覚があった。



(これ……あのときと同じ)

昔の記憶がふたたび、いっそう鮮明によみがえった。女の子だてらに木登りをしていて、枝を切った瘤に股間をこすられて……そのときの何十倍もの快感。

メグの舌が突起全体に柔らかく絡みついてくる。刺激されるたびに肉芽が硬くしこっていくのが、乳首が痛いほど隆起していくのが、自分でもわかった。

「あ……あ、あ……ひい」

エレンの呼吸がだんだん早く浅くなってきた。ぴくんぴくんと、舌の動きに合わせて腰が跳ねる。

そんな妹の動きを冷静に観察しながら刺激を強めていくメグ。妹の股間からあふれた蜜で、口のまわりはべっとり濡れている。

「そこまでだ」

チャールスが横合いからメグの肩を蹴って土間に転がした。

経験はなくても、こんな状況でつぎに何が

起こるか、エレンでもわかる。チャールスが  
おおいかぶさって身体を重ねてくる。

「おお、神様。お赦してください」

エレンは小さくつぶやいて目を閉じた。奴  
隷に、主人の行為をとがめる権利などない。

太くて硬い物が花卉を割ってぎちぎちと侵  
入してきて――ずぐっと、行き止まりを突き  
破った。

「ううう……痛いっ……！」

それは鞭の切り裂くような一瞬の痛さとも、  
洗濯バサミの鋭く持続する痛さとも、乳房を  
握りつぶされる痛さとも違っていた。花卉の  
奥で鈍い痛みが急速に高まって行って、パチ  
ンと弾けた瞬間、身体をまっぴたつに引き裂  
かれたような鋭い痛み。もしも昨日までのエ  
レンだったら、大声で泣き叫んでいただろう。  
しかし、苦痛の洗礼を半日にわたって受けて  
きた少女は、奥歯を噛み締めて涙をにじませ  
ただけだった。

鋭い痛みはゆっくりと引いていった。

「たいして痛そうではなかったな。まさか？」

ぬぷっ……チャールスは怒張を引き抜いた。それが血にまみれているのを見ると、満足そうにうなずいて。ぎしっと、無雑作にエレンをふたたび貫いた。

「ひぎっ……」

痛いのは最初の一回だけと奴隷女たちが話しているのを聞いたことのあるエレンは、この挿入を二回目と考えて、最初と変わらない痛さに驚きの混じった悲鳴をあげた。

ずん、ぬぶ、ずん、ぬぶ……チャールスがゆっくりと腰を動かし始めた。そのたびに、エレンは新たな痛みにさいなまれた。しかし、抽挿が繰り返されるうちに痛みは小さくなっていった。

ずにゅ、ずぶ、じゅぶっ……音が次第に湿り気を帯びてくる。物理的な刺激によって絞り出された蜜に破瓜の出血が加わって、エレンの膣はぬかるみと化していった。

ぱんぱんぱん……下腹部を打ちつけられて、

エレンは顔をしかめた。丸太に押しつけられている腰を上下に揺すられて、肌が擦れた。ちくちくと鋭い痛みは、ささくれが突き刺さっているのだろう。

チャールスは、土間に張りつけられている少女の苦痛にはおかまいなしに、腰を激しく打ちつけた。しかし、まだ精を放つつもりはないらしく。

「さすがに、締まりがきついぞ」

動きを止めて、エレンに体重をあずけた。土のついた掌で双つの乳房をつかんで、上体をわずかに浮かせた。

「うぐぐ……」

自分の体重の二倍近い重みを加えられ、痣だらけの乳房をこねくられ、のけぞって呻くエレン。胸を圧迫されて、息が詰まりそうだった。

「顔をこっちへ向けろ。キスしてやる」

エレンは、その傲岸な命令におとなしく従った。唇をかぶせられ、舌で歯を割られて口

の中を掻きまわされても、顔をそむけようとはしなかった。

(あたしはご主人様の奴隷なんだから)

ご主人様の好きなように弄ばれる存在なのだ、エレンは心の中で自分に言い聞かせていた。眉間に嫌悪の皺が寄るのまでは抑えられなかったけれど。

「口を開けろ」

エレンは、その命令にも従順だった。何を詰められるのかと――犯されている間ずっと閉じていた目を薄く開けた。真上にあるチャールスの口元に、泡立った唾液があふれていた。それが、ランプの光を照り返してつうつと垂れてくる。

エレンは口の中に落とされた唾液を、命令される前に飲みこんだ。メグが食べさせられた汚物よりは、ずっとましだと思った。なのに、涙で視界がにじんだ。

ほう――といった感じでチャールスが片眉を動かした。褒美として快感を与えるつもり

か、乳房を握る手の力を緩めて、親指の腹で乳首を転がした。

エレンはふたたびまぶたを閉じて、乳首に走った悪寒を耐えた。

エレンの乳房に体重をあずけたまま、チャールスが腰の動きを再開した。

ぱん、ぱん、ぱん、ぱん……。

乾いたリズムカルな音が小屋に響いた。

「く……ひっ……ぐう」

エレンの呻き声を調子はずれな切れぎれの伴奏にして。

数分もすると、乾いた音のピッチが早くなって。

「う……」

チャールスの低い唸り声。エレンの中でペニスに脈動し、奥に滾りを叩きつけられたのがわかった。男女の交合の、その目的が達せられたのだった。

チャールスはすぐに立ち上がって、小屋の隅にうずくまっているメグを呼びつけた。ひ

ざまずかせて、まだ萎えきっていないペニスを鼻先に突きつける。

後ろ手に鎖で扼されたメグはそれを口に含んで汚れを舐めた。

自分のせいで汚れた男性器を姉に掃除させて、申しわけないとエレンは思う。破廉恥だとは、もう思わなかった。自分だってチャールスの唾液を飲んだのだから。

そしてエレンは、姉以上の屈辱にさらされた。手首は杭に縛りつけられたまま、ウィリアムの手で屋根の梁から逆さ吊りにされたのだ。

「子宮の奥まで子種を流しこんでやる」

五十歳も近いというのに、メグの口唇清掃で元気を取り戻したペニスをズボンに押し込んでから、チャールスは逆さ吊りにした少女の閉じた腿の付け根をぺちぺちと叩いた。

「可愛い娘を孕め。将来が愉しみだ」

エレンの心臓が凍りついた。

(まさか……!?)

「男なんか産んだら、売り飛ばしてやるぞ」

主人と奴隷の間にも子供は生まれる。それが自分の身にも起こり得るのだとは、たった今まで考えたことはなかった。メグは父親でもある主人の子供を孕まなかったが……もし、孕んでいたら。女の子だったら……メグの娘は父親でもあり祖父でもある主人と……

「そんなの、いやああああっ！」

エレンは絶叫した。

「ひどいよ、パパ。獣だって、そんなことはしないわ。いやよ、赤ちゃんなんか産まない」

今まさに直面している妊娠への恐怖と、生まれた子が祖父でもあり父親でもある男に犯されるという、将来への恐怖。ふたつが緋い交ぜになってエレンを狂乱させていた。

「こいつ、まだ自分の立場をわかっていないね」

ウィリアムが、土間に張りつけられている少女の顔を靴で踏みにじった。

「火をおこそうか？」



「ふむ。母娘をならべてとっておったのだが……あっちは、まだかかりそうだな」

ウィリアムが、三脚で支えられた小さな炉と石炭をします。ご主人様の命令にはなんでも従います。従順な奴隷になります。だから……あたしに娘が生まれても、手は出さないでください。ねえ、聞いているの？」

チャールスが苦笑した。

「それが奴隷の言葉づかいか？」

ウィリアムに踏まれなかったほうの頬に靴底を当てて、ぐりぐりと踏みにじった。

「もぶしわへあひばへん……きぼつへばす」

五分もしないうちにウィリアムが戻ってきた。火壺の中では石炭が赤く燃えている。そこへ焼き鏝を突っ込んだ。

「そ、それって……」

焼けた鉄を肌に押しつけられる恐怖。奴隷の刻印を刻まれる絶望。エレンの唇がわなわなと震えた。

「黙っている。これは命令だ。おまえは良い

奴隷になると誓ったな？」

赦しを乞うことさえ封じられて、少女は恐怖に見開いた目で父子の作業を見守るしかなかった。

チャールスが、焼き鋺を火壺から引き抜いた。薄闇の中に赤く輝く横長のハート形と、そしてS L A V Eの鏡文字。下腹部の逆三角形を狙って、肌に触れる瞬間の温度を勘で調節しながらゆっくりと焼き鋺を近づけていく。「動くなよ。暴れたら文字が崩れるし、火傷も広がるぞ」

肌に焼き鋺の熱を感じて、少女の歯がカチカチ鳴った。

「あああ、ああ……ぎゃわああああーっ!!」

少女の華奢な喉から吐き出されたとは信じられない絶叫。

焼き鋺は、繊細な刻印をつぶさないよう、悲鳴が途絶える前に肌からはなされていた。股間からちよろちよろっと漏れ出た小水が、火傷のくぼみにそって流れていく。

「これはいい。消毒の手間が省ける」

「メグもベティも失禁しなかったぜ？」

「ふむ。それもそうか」

そんなことを言い合いながら、二人は失神しているエレンを土間に下ろした。手首の縄もほどいて上体を引き起こし、背後で腕を重ねて鎖で巻いた。小屋の壁に少女の背中をもたせかけておいて、刻印された下腹部にチャールスが放尿した。

――脇腹を蹴られて、エレンは束の間の安息から地獄に引き戻された。エレンとチャールス父子との間に、ジェニィの姿があった。土間にX字形に張りつけられていた。腰に丸太をあてがわれて下腹部を突き出しているのも、エレンのときと同じだった。

「これから、お前の母親にも焼印を捺す。悲鳴をあげずに耐えるそうだ」

従順な奴隷とはどういうものか、母親を見習えとチャールスが言った。すこしでも声を出したら、おまえの娘の乳房に別の焼印を捺

すぞと脅したことは黙っている。

ジェニィの裸身は、娘よりはるかにひどく傷ついていた。鞭打ちの痕だけではない。太腿を凄絶に彩る鮮血は、肛門に裂傷を負った証だった。秘裂は、小屋まで歩かされる間にほとんども垂れ落ちたにもかかわらず、まだ白濁で埋まっていた。顔は泥だらけで、口からは血を流していた。それは、エレンが犯されたと知って元夫をなじったためだった。

「約束どおりだぜ。俺は、おまえの娘には何もしなかった」

ウィリアムは継母だった牝奴隷を土間に張りつけたあと、その顔を踏みにじり、何度も蹴とばしたのだった。

赤く輝く焼き鍔をウィリアムが火壺から取り出して、牝奴隷の大きく開かされた脚の間に立った。

ジェニィは顎を宙に突き出すようにして目を閉じた。歯を固く喰いしぼる。

ウィリアムはゆっくりと焼き鍔を牝奴隷の

白い下腹部へ近づけていく。その熱で鬨りを焼き払ってから。

ジュウッ……かすかな煙がたちのぼった。

「んむっ……！」

押し殺した呻き声。ジェニィは、はあはあと荒い息づかいを繰り返した。

ウィリアムがズボンをずり下げて、牝奴隷の股間へ放尿した。火傷の初期治療には冷却が重要だが、淀んだ汲み置き水などで洗うとケロイドが残りやすい。つまり、焼印を捺す目的にかなった処置とはいえた。もちろん、奴隷を辱めて、自分が絶対的に支配されていることを思い知らせる目的が第一ではあったが。

ジェニィも磔から引き剥がされて、背中で腕を縛られた。ウィリアムに引きずられて、娘の隣に並んで裸の尻を土間につけた。

「傷が落ち着いたら母親は寡婦小屋、娘は繁殖小屋だ。今のうちに名残を惜しんでおけ」

父子はメグに命じて、梁から吊られている

奴隸男の股間から皮袋をはずさせた。メグが外へ行って皮袋の中身を捨てて井戸水を汲んで戻ってくるあいだに、ウィリアムが奴隸男を土間に叩きつけるような勢いで吊り下ろした。

革袋の水を母娘の下腹部に流し掛けてから、父子はメグと奴隸男を追い立てて小屋から出ていった。脚が萎えてひとりで立てない奴隸男に肩を貸したメグは、その重みによろめきながら、小屋に残される二人をちらっと振り返った。夜の闇の中で、ふたつの瞳が悲しそうに瞬いた。

#### 4. 父親への性奉仕

ふたりは、長いこと沈黙をつづけていた。いきなりの、ナイアガラの滝よりも大きな落差の転落。慰め合う言葉も、励まし合う言葉も、あろうはずがなかった。

「天にまします我らの父よ」

長い沈黙の末に、ジェニィの口から低い祈りが紡がれる。

「我らの希望を明日も与えたまえ、我らを犯すものを我らが……我らが……赦すごとく」

そこから先は、エレンには聞き取れなかった。

「……アーメン」

「ママのひいお祖母様が黒人だっていうのは……本当にほんとなの？」

祈りが終わるのを待って、エレンがささやくように訊ねた。

「……子供の頃、黒人の男の子と喧嘩して泣

かされたの」

数分の沈黙のあと、ジェニィが、これもつぶやくように答えた。

「黒人のくせに生意気だって父に言いつけたら、おまえの曾祖母だって黒人だったんだぞって叱られた」

沈黙の間に話すべき言葉を選んでいたのでろう。ジェニィの語りは抑制されていて滑らかだった。

「曾祖母が奴隷監督に犯されて産んだ娘は別の農園へ売られて、そこで白人の使用人と恋仲になって北部へ脱走して……もちろん正式の結婚まではできなかったのだけど、幸せに暮らしてわたしの父を産んだ。父は混血とわかる肌の色と顔つきだったのに、白人の娘と結ばれたの。でも、母は私が六つのときに結核で亡くなった。父のことを良く思っていなかった母の家族は父を追い出して——これは、父の希望でもあったのだけど、まったくの白人にしか見えないわたしは、養子に出された。



ああ、これは別れる前の晩に父が話してくれたことよ。すっかり忘れていたわ」

忘れようと努めたのかもしれない。エレンは、ちらっと思った。ここから後のことは、エレンもなんとなく知っている。

ジェニファーを養子にしたアンダーソン夫妻は、新天地を求めて南部へ移住した。そうして、ジェニファーはチャールス・グレイと結婚してエレオノーラを産んだのだった。

エレンは知らなかったが、ジェニファーが歳のはなれたチャールスと結婚したのは、養父母への恩返しの意味もあった。新しい土地での商売に失敗した夫妻は、チャールスから出た支度金を使って、慣れ親しんだ北部へ戻っていったのだ。エレオノーラとは縁が切れたも同然だった。

「あたしは白人じゃなかったんだ」

母の口から聞かされた真実に打ちのめられて、エレンがつぶやいた。

「それでも、わたしたちが人間にあることに

変わりはないのよ」

「違うわ。あたしたちは人間じゃない。奴隷の地位がふさわしい劣等人種だわ！」

エレンは、母親の言葉を激しくさえぎった。まるで、なじっているような口調だった。

「……あたし、ご主人様に褒めていただけるような奴隷になる」

偏見に凝り固まった白人社会で育てられてきた少女は、本気でそう決心したのであった。

それは間違っていると（少女よりは広い見識と宗教的な信念とに基づいて）考える母親だが、娘を説得する言葉までは出てこなかった。

ふたりは敷き藁に身を横たえ、ときどき身体の向きを変えて痛みに耐えながら、夜明けを迎えた。母娘の身体が触れ合うことは一度もなかった。

陽が地平線からはなれて間もなく。チャールズがひとりで折檻小屋に姿を現わした。水

を入れた浅い小さな甕を、便器代わりの桶の横に並べた。

「一日分の水だ。そのつもりで飲め。食事は、これだ」

バケツから生のトウモロコシを取り出した。

「手が使えなくては食えまい。口を開けろ」

エレンが敷き藁から体を起こして、チャールスの前にひざまずいた。主人を仰ぎ見て、従順に口を開けた。ぐぼっとトウモロコシを喉の奥まで突っ込まれて、小さな呻きを鼻から漏らした。

娘に機先を制せられて、ジェニィは抗議の機会を失った。娘にならって、ひざまずいて口を開いた。

「トウモロコシは、一日に二本だ。こっちも儂が食わせてやる。うつ伏せになってケツを上げろ」

「……………!!」

母娘が同時に、目を見開いた。すでにエレンも、言葉に隠された意図を理解するに足る

経験を積みされていた。エレンは腰を浮かして上体を倒していき、バランスを崩して横ざまにひっくり返った。ジェニィはトウモロコシを口に咥えたまま身体を二つに折ってから肩を土間につけて、膝を後ろへ引いた。エレンはいちど腹這いになってから、膝を引きつけて尻を上げた。

「娘に手本を見せてやれ」

チャールスが左手でジェニィの花卉を割り広げて、まったく潤いのない穴に、右手に握ったトウモロコシをねじり挿れた。

「んぐっ……」

ジェニィの苦痛を訴える呻きにはかまわず、ぐりぐりと左右にねじりながら突っ込んでいく。肉の壁に先端が突き当たっても、チャールスはまだトウモロコシから手をはなさない。上下左右に細かく動かして子宮口をさぐり、ぐいと押し込んだ。

「むぐうーっ……！」

ジェニィの膝から先が宙に浮いて、ぷるぷ

ると痙攣した。

エレンは左に顔をひねって土間に頬をつけていたので、トウモロコシが茎の部分を残して母の股間に埋没したのが、はっきりと見えた。

「さて、つぎは娘の番だ。おお、塩分も補給してやらんとな」

バケツの底から塩をつかんで、トウモロコシにたっぷりつまぶした。それを、まだ破瓜の傷が癒えていない股間に、無雑作に押し挿れようとする。

めりめりめりと、処女を奪われたときよりも激しい、身体を引き裂かれるような痛み。ペニスよりもはるかに太くて長い物体を受け挿れるには、エレンの身体は稚なすぎた。

「ぐぎいっ!!」

エレンは歯を喰いしばった。そのとき。

ボキッ……！

口の中のトウモロコシが折れた。歯を噛み合わせた衝撃で、トウモロコシが喉の奥深く

まで押し込まれる。

「ん……んん、んん！」

トウモロコシに喉をふさがれて、エレンは息を詰まらせた。息を吸うことも吐くこともできなくなった。エレンの青白い顔が、たちまち赤く染まっていく。

「この馬鹿が！」

異変に気づいたチャールスは、土間に転がった半分のトウモロコシを見て事情を悟った。エレンの顎をこじ開けて、トウモロコシをつまみ出そうとする。しかし、彼の太い指はトウモロコシをさらに奥へ押し込む役にしか立たなかった。

チャールスは、エレンの足首を握って立ち上がった。左腕を高々と差し上げて、片脚だけでエレンを宙吊りにする。

どすんと、右のこぶしでエレンの腹部を殴った。

「ぐえっ……！」

エレンは苦痛にのけぞった。異物に喉の奥

を刺激されて起きる嘔吐反射に加えて、腹筋の激しい動きが、トウモロコシを押し戻した。

「げええええ……」

トウモロコシの先端が、ぼてっと土間に転がった。よだれと胃液で、エレンの顔はぐしょ濡れになった。

「あ、ありがとうございます」

はあはあと息を吐きながら、エレンは感謝の言葉を口にした。それは――奴隷ならそうすべきだと考えたからではなかった。本心からの言葉だった。

屋外で全裸に剥かれて鞭打たれ、縛られて犯され、生涯消えることのない焼印を下腹部に刻まれて。奴隷としては、そのすべてを受け入れるしかないと自分に言い聞かせても、心の奥底でこの男への憎悪がつのっていくのは止めようがなかった。しかし。この男は自分を殺さない。生命の危機に瀕したときは助けてくれる。その認識が、憎悪をやわらげてくれた。

しかし、少女の甘ったるい感傷をあざ笑うかのように。チャールスはあらためてトウモロコシを拾いあげると、片脚吊りにした少女の股間に垂直にあてがった。

エレンは顎に力をいれて、自分に襲いかかるだろう激痛にそなえた。そのときだった。腰の奥に、エレンはささやかな熱のようなものを感じた。あるいはそれは――肉体を異物の侵入から保護しようとする反射作用だったのかもしれない。しかし、被虐への予感がエレンを濡らしたという事実には違いなかった。「んぐぐぐぐ……」

ずぐっとトウモロコシを挿入されて、エレンは呻いた。悲鳴はあげなかった。太腿の筋肉が緊張して――そうすると痛みが増したので、エレンは意識して力を抜いた。

トウモロコシを引き抜いては、いっそう深く押し込んでいくチャールス。トウモロコシが血に染まっていく。

「うぎいい……」



トウモロコシにまぶされた塩の粒に、引き裂かれたばかりの膣口をザリザリとこすられて、喰いしばった歯の間から苦鳴が押し出される。

トウモロコシの先端が穴の奥に達したところで、チャールスは手を止めた。敷き藁に少女の頭を埋めて身体を斜めに倒してから、最後はどさっと投げ出した。

チョッキから取り出した懐中時計を見てふうっと吐いた息は軽い満足なのか、虐め足りない不満なのか。忙しい朝の時刻に、農園主がいつまでも奴隷にかまけている暇はない。後ろ手に鎖で縛られた母娘を置き去りにして、農園へ引き返していった。

主人の姿が見えなくなるとすぐに、エレンは身体を曲げて太腿の間にトウモロコシを挟んだ。そのまま伸びをすると、トウモロコシはすぽんと抜けた。

ジェニィのほうは、そう簡単にはいかなかった。どうもがいても、根元まで埋め込まれ

たトウモロコシを吐き出せない。ジェニィは口のトウモロコシを吐き出してから立ち上がって、脚を開いた姿勢で何度も飛び跳ねた。ジャラッジャラッと、腕を扼した鎖の音が小屋の中に響く。半分ほどトウモロコシが顔を出すと、あとはエレンと同じやり方で引き抜けた。

「エレン、こっちを食べなさい」

ジェニィは口から吐き出したほうのトウモロコシを娘に譲ろうとした。

「いらぬ。ご主人様にいただいたのを食べる」

エレンは腹這いになって、土間に転がっている血まみれのトウモロコシを横に啜えた。ぱりぱりと、歯で粒をこそげとっていく。粒の間に残っていた塩と自分の血で味付けされ土にまみれた生のトウモロコシは、食事どころか餌にも値しない代物だった。咀嚼するごとにじゃりじゃりと口の中が鳴って、しょっぱくて鉄臭い味が口中に広がった。そのぱさ

ついた食感を、エレンは吐き気をこらえて嘔下したのだった。

そんな娘の様子を見て、ジェニィも自分の子宮まで犯した異物にかぶりついた。ジェニィは半分も食べないうちに、気分の悪そうな顔で身体を起こした。エレンのほうは、与えられた餌をきちんと食べるのも奴隷の務めだというように、時間はかかったが一本丸ごとを食べてしまった。

——陽が昇り沖天に達してまた傾き始めるまで、ふたりはまったく言葉を交わさなかった。

ジェニィは、娘の葛藤を理解していた。

白人だけが神に選ばれた人間であり、黒人は下等な存在だと——父親の薫陶を受けて、娘は信じ込んでいた。そのとおりに行動してきた。その自分が実は黒人の血を引いているとわかったからといって、簡単に信念を変えるわけにはいかない。あえて奴隷としての運命に甘んじなければ、生まれてから昨日まで

の自己を何からなにまで否定することになるからだ。

ジェニィはといえば、白人も有色人種も同じ人間だと考え、夫の機嫌を損ねない範囲ではあったが、奴隷たちに優しく接するよう心がけてきた。自分も八分の一だけ黒人の血を引いているのだという忘れかけていた記憶が、信念の形成に大きく影響していたのかもしれないが、それはともかくとして。奴隷の境遇に墮とされたからといって、彼女は彼女であり続けることができた。元夫と義理の息子に隷従したとしても、それは娘を守るためだった。

もしジェニィひとりの問題だったら。断固として反抗をつづけて、尊厳とともに縛り首にされる道を選んだかもしれない。しかしそれでは、自分に向けられるはずの鬱憤や怨恨を娘に負担させる結果となるだろう。母親としては不可能な選択だった。

その最愛の娘が、落ち着かなさそうに腰を

もじもじさせている。粗相をして見つければ、折檻の口実をチャールスたちに与えてしまう。

ジェニィは立ち上がって小屋の隅へ行き、桶を跨いでしゃがんだ。

娘に範を示すためとはいえ、羞恥がともなった。ちよろちよろっと股間から水があふれるまでに一分はかかった。小さな水流は最初尻に伝わって落ちていたが、すぐに音を立てて桶を打ち始めた。放尿が終わると、そのまま立ち上がる。腕を縛られていては跡始末はできない。

ジェニィが元の位置に腰を落とすと、エレンが桶に駆け寄った。またぐなり、じゃあじゃあと派手な音を立てる。桶に溜まった尿が跳ねて太腿を汚したが、不快な顔をする以外にどうしようもないのだった。

二日目の朝は、奴隷監督の部下が給餌に訪れた。雇主のような弄虐はせず、四本のトウモロコシを母娘の裸身に投げつけただけだっ

た。排泄桶の処理と小屋の掃除は、連れてきた老爺の仕事だった。

母娘は腕を扼していた鎖をほどかれ、あらためて手首を小さな木枷で後ろ手に拘束された。同じ部位を圧迫しつづけて壊疽を起こさせないための処置だった。

この日、母娘は何度か短い会話を交わした。

三日目にもなるとエレンは、これまで知らなかったチャールスの悪行をいろいろと知ってしまった。彼の異常な性癖の犠牲となったのは、メグだけではなかった。

最初に下腹部への焼印を施されたのは、チャールスの異母妹で黒人夫婦の養女として育てられてきたパム。もう四半世紀も昔の話だ。彼女は二年目に流産して、その直後に自殺している。

そのつぎは、今年で三十五歳になったレニィ。彼女の顔はエレンも知っていたが、三児の母となっている彼女にそんな過去があったなんて、思いもよらないことだった。

ベティという娘は、五年以上もチャールスに可愛がられていた。どんな可愛がり方だったかはともかく、チャールスの興味が失せたあとは売り払われていった。

そして、黒人に強姦されて身ごもった白人女性に捨てられたドーラ。一年半前に奴隷市場で買われてきた娘だった。メグよりも二歳若いこの娘は、奴隷にしては小奇麗な服をたまに着ていたから、エレンもなんとなく疑っていたのだけれど。

ジェニィが知っているのは、メグの他にはこの四人だけだったが、主人の気まぐれで何度か抱かれたという程度の娘なら、さらに十人以上はいるだろう。

かつては世界で一番尊敬し愛していた人間の淫放ぶりに吐き気すら催したエレンだったが、それでも彼女は自分をたしなめるのだった。

(主人が奴隷をどう扱おうと、それは法律で許されている。たぶん神様にも……?)

——五日目。エレンの覚悟を試される夜が訪れた。

その夜。ふつうの幸せな生活がつづいていたら、ディナーのあとの一家団欒の頃合いだったろうか。母娘は奴隷監督のデュースに監禁小屋から引きずり出された。首に巻かれた鎖で引っ張られ、裸足で荒地を歩かされて、かつては自分たちの住家であった屋敷の、当主の寝所へ連行された。

「ああああ、あーんっ……」

甲高い女の悲鳴、いや嬌声が二階から聞こえてきた。エレンではなく、ジェニィが眉をひそめた。彼女が妻として屋敷を宰領していたときには考えられないことだった。声は、六日前までは義理の息子だったウィリアムの部屋から漏れていた。その隣は空き部屋で、廊下の突き当たりが、チャールスの居室になっている。

かつての夫の寝室は、壁に掛けられたランプが芯をいっぱい上げて煌々と灯りをはな



ち、サイドボードや書き物机にも臨時の灯りが置かれていた。真昼のように明るい部屋の奥には、六日前まではジェニファーが褥を共にしていた巨大なベッド。そのベッドを背にして、母娘は立たされた。まだ暗赤色の瘡蓋におおわれている焼印の痕を、チャールスが満足そうに眺める。ジェニィの股間は、針先のように短い褐色がかった金色でうっすらおおわれていたが、焼印のまわりは毛根まで死滅したのか、まったくの無毛になっていた。エレンのほうは、母親より色が薄いうえに元から疎らだったので、陰毛はほとんど目立たない。

デュースがエレンの縛めだけをほどいてから、部屋を出て行った。

「エレオノーラ、そこで身体を洗え」

部屋の一画に置かれた大きな洗い桶をチャールスが顎で示した。

身体を洗って、それから何が起きるのかを、母も娘も理解していた。エレンはこわばった

蒼白の顔で、淡いピンク色に染まった裸身を、湯桶に浸した。

「ジェニファー、おまえはこっちで儂を奮い勃たせろ」

ズボンを緩めて半勃ちのペニスを露出させたチャールスが、縛められたままのジェニの鎖を引き寄せて、腰かけた椅子の正面にひざまずかせた。長い結婚生活のあいだ、一度も夫の破廉恥な要求を受け入れなかったジェニが、むしろいそいそと、チャールスの股間に顔をうずめた。チャールスを啜えて、命令されるまでもなく舌を動かし始めた。

エレンは母の痴戯を横目に見ながら、今にも泣き出しそうな表情でボディブラシを使っていた。母の意図は、痛いほどわかっていた。口唇淫戯で暴発させてしまえば、五十歳を目前に控えたチャールスのことだ。実の娘への今夜の凌辱は果たせなくなるかもしれない。

けれど、それを期待してはいけない。ご主人様があたしを望まれるのなら……真心を込

めてそれにお応えするのが、奴隷の義務なんだわ。エレンは、本気でそう思っていた。

果たして。チャールスは古女房だった牝奴隷に精気を吸い取られるようなへまはしなかった。十分にいきり勃ってくる、髪をつかんでジェニィを引き剥がし、萎えてくるとまた口唇奉仕を強制した。

エレンは最後に、股間を指で洗った。メグに恥垢を舐め取られた羞恥を忘れてはいなかった。それから、洗い桶から出てタオルで全身をぬぐった。

エレンが身体を拭いているあいだに、チャールスも裸になっていた。大きなベッドの真ん中に仰向けに寝転がって、エレンを呼びつけた。

「来い、エレオノーラ」

白人にとって、奴隷は通称でしか認識されない。アルの本名がアルフレッドでもアルバートでもアレックスでも、白人には関係がない。それなのにわざと正式名を使うことで、

チャールスは母娘を辱めようとしているのだろう。あるいは、限りなく白人にちかい実の娘を犯すという背徳の愉悦に耽っているのかもしれない。

エレンは、ちょっと迷ってからタオルを捨てた。一糸まとわぬ姿で、ベッドの脇に立った。

「来いと言っておるのだぞ」

チャールスがまっさらのシーツを軽く叩いた。

「ここへ来て、儂を跨いでひざまずけ」

タオルを捨てたときよりも長く逡巡してから、エレンはベッドに上がった。

「失礼いたします、ご主人様」

馬鹿丁寧に断わってから、エレンは男を跨いで膝をついた。

ジェニィは最初にフェラチオを命じられた椅子の前にひざまずいたまま、全裸の父娘を喰い入るように見つめている。元夫の冒瀆を諫めても、彼の怒りを招くだけだった。自分

だけならともかく、娘にもとぼっちりが行きかねない。そして娘をたしなめたところで、主人への不服従をそそのかす奴隷女の言葉に従うはずがない。むしろ依怙地にさせるだけだろう。ジェニィとしては、ただ見守るしかないのだった。

「自分で挿れろ」

簡潔な命令。エレンはきょとんとした。

「何をどこへ突っ込むか、もう知っているな。自分で挿れろ」

エレンの蒼ざめていた頬が、ぱあっとピンク色に染まった。表情を封じて宙に据えていた瞳が、羞恥と屈辱に揺れて弱々しく男を見下ろした。

「はい……ご主人様のおっしゃるとおりに致します」

内心の動揺を隠して、エリイはちいさくつぶやいた。腰をすこし沈めて前へ突き出し、尻の後ろからまわした右手で怒張を握った。

(あ……)

掌に包んだ瞬間、びくんと太さを増した怒張。それを秘裂に導いて、左手で花卉をくつろげた。腰を前後にずらして、盛り上がった肉に囲まれた小さな穴に怒張の先端をあてがった。エレンは腰を沈めて怒張を穴へ迎え挿れようとした。しかし、母親が懸命に塗りまぶした唾は、すでに乾いていた。潤いのない膣口はわずかな侵入にも、激痛をエレンに訴えた。

「くう……」

それでもエレンは腰を落とそうとするのだが、膝がいうことをきいてくれない。

「ご主人様、もう一度わたしにコックを舐めさせてください」

見かねたジェニィが、羞恥をかなぐり捨てて訴えた。

「駄目だ。おまえは、そこで見ている」

そのやり取りを聞いて、エレンは自分がするべきことに気づいた。

「それじゃご主人様……あたしが舐めさせて

「いただいてもかまいませんか？」

「何を舐めたいのだ？」

「あの……ご主人様の……コックを」

「そんなに舐めたいのか？」

チャールスにしてみれば、小娘を軽くからかっているだけだが。エレンは言葉のひとつひとつを、羞恥に悶えながら喉から押し出している。

「は、はい。どうしても、コックを舐めさせていただきたいんです」

「そんなに欲しいのなら、あとでくれてやる。まずは、とっとと挿れてしまえ」

「……………」

はしたないお願いの理由を、チャールスは百も承知していた。それを拒絶するというのだから――少女に不必要な苦痛を与えようという意図があるのは明白だった。

エレンはあらためて、はっきりと、この男が自分たちを憎んでいるのだと思い知った。

（それでも……あたしは、この人の奴隷なん

だ。ご主人様の命令に逆らってはいけない)

ご主人様を恨んじゃいけない。どんなにひどい命令でも従順に受け入れて、真心を込めてご奉仕すれば……

(可愛がっていただけるようになる……きつと)

白人としての思考に、少女は呪縛されていた。白人が求める『良き奴隷』になろうと、最初の日の決意をけなげによみがえらせた。

「……コックを挿れさせていただきます」

エレンは息を止めて、グランドキャニオンに身を投げるほどの悲壮な覚悟で膝の力を抜いた。

ぎちぎちっと内側を激しくこすられる痛み。ぐうっと細い穴をこじ開けられる痛み。ずんっと奥底を突き上げられる痛み。それらがひとかたまりになって爆発した。五日前の破瓜と変わらない激痛だった。いや……自分で自分に与えた苦痛だという思いが、痛みを倍加させていた。



「エレン……空いている手で、自分のクリトリスを刺激しなさい」

ジェニィがとんでもないことを言った。

「そうすれば、自分のそこも潤ってくるのよ」

避けられない受難なのだったら、せめて肉体の苦痛だけでも取り除いてやりたいという思いから発せられた言葉ではあったが。ずっと昔に厳しく叱った行為を、今のジェニィは娘に勧めていた。

エレンは花卉をくつろげていた左手を上へずらした。クリトリスという単語を聞いたのは初めてだったが、それがどこを指すかは直感していた。

小さな皮の隆起にそっと触れただけで、おしっこを漏らしそうな感覚が奔った。それは、たしかに快感だった。メグにされたことを思い出して――エレンは二本の指で隆起を挟んで、おそるおそるめくってみた。

「ひゃぶっ……」

尖鋭な快感が背筋を駆け上がった。股間が

熱く潤ってくるのが、はっきりわかった。

小さな穴を無理に拡張される苦痛と、小さな突起がもたらす純粹の快感。エレンには、そのふたつが同じ部位から発しているとは感じられなかった。相反する感覚の拮抗。そのどちらを優勢にしたいか、そのためにはどうすればいいか。エレンは、剥き出しになった肉芽の突端に軽く指で触れた。刹那……快感が苦痛を凌駕して、エレンはぶるっと全身を震わせた。

「主人を差し置いて、ひとりで遊ぶとは何事だ」

チャールスが両手を上へ突き出して、目の前の小ぶりの乳房を強く握った。性的に未熟な少女の自流行為に興味を覚えて、主人の許しを得ない振る舞いを黙認したのだが、勝手に気持ち良くなられては面白くなかった。

「腰を動かせ。儂を愉しませろ」

エレンは稚ない官能から引き戻されて、あとには苦痛だけが残った。そこへ、乳房の痛

み加わる。

つかまれた乳房を中心に弧を描くように、エレンは腰を浮かした。ずるうっと……内臓を裏返されるような、鈍い痛み。

(これくらい……平気。我慢しなくちゃ。ご主人様を愉ませて差し上げるのが、あたしの務め)

エレンはさらに踏ん張った。ずずっと、膣口が押し広げられる。先端の付け根の部分(エレンは、性器の一部を指す単語を知らなかった)が抜け出ようとしているのだと、感じられた。抜いてしまうと、また挿入で苦勞する。

(頑張れ……だんだん気持ち良くなるはず)

耳年増目年増のエレンは自分を励まして、腰を沈めた。

ずぶっ……濡れかけた肉穴を奥まで貫く音。

「もっと早く動け」

チャールスの指が、乳房に喰い込んだ。

「ぎひ……はい……」

エレンは乳房の痛み能耐えかねて上体を倒

し、両手をチャールスの肩に置いた。チャールスは、手をどけるとは言わない。かわりに、乳房をもぎゅもぎゅもぎゅと、リズムカルに圧迫した。

「あう……うんっ、ふっ、うんっ……」

エレンは両手で体重を支え、乳房の痛みに合わせて膝を屈伸させた。

ずぐ、ぬぷ、ずぶ、ずっぷ、ずにゅ……

エレンの腰が上下するつどに、そこからこぼれる音が湿っていく。痛みが薄れていって、内側からの圧迫感だけが残った。快感は、なかった。エレンにとってそれは、単に膝の疲れる器械的な運動にすぎなかった。

「後ろ向きになれ」

チャールスが乳房から手をはなして、エレンの腰を支えた。エレンは命じられるままに、股間を穿つ肉棒を中心にして身体を半回転させた。そして上下運動を再開する。腰をつかまれたままなので、身体を前へ倒せなかった。直立させたまま、全体重を支えて膝を屈伸さ

せた。

「あん……？」

肉棒の先端で下腹部の内側をこすられて、エレンは初めてなまめかしい声を漏らした。クリトリスから放射される鋭い快感ではなく、腰全体にじわっと広がるような――これまでに経験したことのない感覚が、かすかに起こったのだ。

（だんだん気持ち良くなるって、このこと？）

好奇心に駆られて、エレンは腰を上下させた。しかし、同じ感覚はよみがえらなかった。腰を突き出してみたり引いてみたり。肉棒の当たる角度を変えても駄目だった。

わずか二度目の性交。トウモロコシによる凌辱を数えても三度目。エレンの肉体は、開発される下地すらもととのっていない。抽挿を苦痛と感じなくなっただけでも上出来といえるだろう。

未熟な少女が自発的に、しかも熱心に腰を振っているさまは、それはそれでチャールス

の嗜虐癖をそそったらしい。それとも、苦痛を与えられなくて興が醒めたのか。チャールスは身体を起こして少女の背中を強く押した。つながったまま、四つん這いの後背位へ形を変えた。背後から乳房をつかんで少女の身体を持ち上げ気味にして。

ばんばんばん……と、腰を強く打ちつけた。乳房をつかむ手が腰と反対に動いて少女を揺さぶる。膣口から奥底まで、亀頭が荒々しく往復を繰り返した。

「あっ…あっ…あっ……」

喘ぎというよりは、腹を押されて自然と漏れる息だった。

ずっちゅ、ずっちゅ、ずっちゅ……粘っこく湿った抽挿音が、声に重なる。

「うおっ……」

チャールスが動きを止めて、野太い呻きを漏らした。腰がぶるっと震えた。

「ふう……いい具合にこなれてきおった」

チャールスは少女の尻を叩いて向きを変え

させた。自分は、ベッドにごろんと仰向けになって、組んだ両手を枕がわりにした。

「跡始末をしろ」

エレンは、最初の夜に姉がしていた行為を思い出した。四つん這いのまま足元からにじり上がって、チャールスの下腹部に顔を近づけた。

（へええ……？）

こんなにも間近く男性器を観察したのは初めてだった。女性器の複雑怪奇な形状に比べると、実にシンプルだった。これのどこに、自分をあんなにも苦しめた凶暴さが隠れているのだらうと、それが不思議なほどだった。が、そんな感想は一瞬のこと。先端の小さな口からこぼれている白い涎を、エレンは舌で舐め取った。しょっぱいような、いがらっぽいような、ねとつとした感覚が舌尖に絡みついた。獣じみた生臭さが鼻をついた。

エレンは唾をためてから、舐め取ったものを飲みこんだ。それから息を止めて、シンプ

ルな凶器を縦に半分ほども口中に含んで、丹念に舐めた。

ぴちよぴちよ、くちゆくちゅ……かすかな音が唇から漏れる。エレンは本能的に、先端部の張り出したあたりを集中的に舐めていた。

最後にエレンはチャールスに命じられて、太いストローを吸うように、頬をすぼめて肉棒の中に残っている精液を啜り取った。それも、唾と一緒に飲みこんだ。

チャールスは身体を起こしてサイドテーブルの呼び鈴を手にとると、チリリンと軽く鳴らした。

「お呼びでしょうか？」

ジェニファー付きだった女中が姿を現わした。小さな呼び鈴の音を聞きつけたのだから——この女中は、部屋の中で起きたことをすべて聞いていたことになる。

「ハムを持ってこい。ステーキの厚みで一枚だ」

ベッドから下りて身づくろいを始めるチャ



ールス。

いつまでも奴隷がご主人様のベッドに居座っているのは行儀が良くない。そう考えたエレンはベッドから下りて、母親と同じようにひざまずいた。

女中がハムを皿に載せて戻ってくると、チャールスはそれをエレンの膝元に放った。

「今夜は上出来だったぞ。褒美だ、食え」

この五日間、一日に二本の生トウモロコシしか与えられていなかった。以前は日常的に食べていた脂っこくて塩味の濃い肉塊が、エレンの目にはきらきら輝いて見えた。

「ありがとうございます」

エレンは迷うことなく、四つん這いになってハムを口に咥えた。

「あ……」

母親の小さな驚きの声は、エレンの耳に届かなかった。

ハムをがぶりと噛み千切ると、脂肪のねっとりした甘みが口いっぱいに広がった。地獄

の底で味わう一瞬の至福。エレンは、一枚のハムをががつと貪り食った。

「家畜としての心構えが、身についてきたようだな」

チャールスが、驚いたことに微笑さえ浮かべてエレンの頭を撫でた。

「手を使おうとしなかったのは、おまえが初めてだ。なぜだね？」

なぜだろうと、エレンは自問した。

「あの……ご主人様がおっしゃったように、それが家畜にふさわしいと思ったので」

ほとんど反射的に身体が動いていたのだが——言葉にしてみると、そういうことだった。白人としてのエレンの論理が、奴隷としてのエレンの肉体を動かしたともいえる。

「これからも、その心がけを忘れぬことだな。おまえも、娘を見習え」

最後の言葉は、ジェニィに向けられたものだった。

彼女は目を伏せて黙っていた。

## 5. 鎖の貞操帯

褒められたからといって、エレンへの処遇が変わったわけではなかった。母娘は素裸のまま後ろ手に拘束されて、折檻小屋へ戻された。二本の生トウモロコシと水だけの餌を与えられて肛門に排泄物をこびりつかせたままの生活が、さらに五日つづいた。エレンは生理を迎えて、とりあえずは妊娠の恐怖から解放された。

その日の夕方。珍しくチャールスがデュースたちを連れて折檻小屋を訪れた。

「焼印が綺麗に仕上がってきたな」

瘡蓋が剥げてピンク色に盛り上がった線条を指でなぞって、満足そうにあざ嗤った。

「明日からは、ほかの奴隷どもと一緒にこき使ってやる」

デュースの部下が、チャールスに長さ五フィート（百五十センチ）の鎖を差し出した。

直径四分の一インチの鉄線で作られた環のひとつひとつは、長さが二インチ、幅が一インチ（二十五ミリ）だった。チャールスはエレンだけを立たせた。腰のくびれを鎖で厳しく締めつけ、8の字形をした留め金を使って背中で固定した。長く余った端を股間にくぐらせて、前で引き絞る。

「く……」

冷たい金属に秘裂を割られる異様な感覚に、エレンが小さく呻いた。

チャールスは左手で股間の鎖を引き上げながら、右手で腰を巻いた鎖を押し下げた。腰の鎖を焼印の下までV字形に絞り、下から持ってきた鎖と重ねて南京錠に通した。南京錠はもちろんのこと、背中の留め金も専用の工具を使わないと開閉できない。

「ほかの奴隷の子種を孕ますわけにはいかなからな」

うそぶいて、母娘を蒼ざめさせる。

「鎖でカントを締めつけられて、痛いかな？」

「いえ……そんなには。でも……」

どのような答えを求められているかわからずに、エレンは口ごもった。

「痛みを忘れさせてやろう」

チャールスは鎖を微妙にこじって、下腹部の皮膚を引っ張った。包皮が押し下げられて、肉芽がびよこんと顔を出した。

「ひゃん……！」

股間を割る鎖の環に嵌りこんだ鋭敏な突起が、金属の冷たさに刺激されて――すこし尖った。環の内側の幅は半インチ（十三ミリ）。チャールスが手をはなしても、包皮は鎖に押しつけられて肉芽が剥き出しのままになった。

「これで鎖が好きになるし、身体を動かすたびに気持ち良くなるぞ」

エレンは唇を噛んで、鎖にくびられた下腹部に視線を落とした。この人はなぜ、こんなにも自分を辱めるのだろうか。その答えは知っている。だから悔しかった。

「あの……」

エレンは頭に浮かんだ疑問を口にした。  
「用を足すときは、鎖を外していただけますよね？」

「邪魔にはなるまい」

チャールスの返事はむごかった。

「儂に股を開くとき以外は、貞操帯を外すことは許さん」

チャールスは余った鎖を折り返して、端を南京錠につないだ。その鎖と南京錠で、エレンの性器はかろうじて隠された。母親は八分の一インチ（二ミリ半）ほどに伸びた陰毛を晒したままだったが、そのほうがましだとエレンは思った。

母娘は後ろ手の枷を外されて、破れかけた靴を与えられた。

「外へ出ろ」

巻いたままの鞭でピシッと尻を叩かれて、エレンは歩き始めた。が、すぐに顔をしかめて立ち止まった。鎖の端が揺れて、クリトリスの先端に当たったのだ。気持ちが良いどこ

るか、うずくまりそうになる痛さだった。

ピシッとふたたび、さっきよりも強く尻を叩かれた。仕方なく、エレンは腰を引いた姿で歩いてみた。チャラチャラと鎖は鳴るが、股間には当たらなくなった。そのかわり今度は、股間を割っている鎖の環が肉芽の側面をこすった。

「あ……」

不本意な快感に、エレンは小さく身悶えした。この鎖は、装着した者を間断なくを責めつづける道具だった。

チャールスたちに追い立てられて農場まで歩きとおしたとき、エレンの内腿は蜜で濡れそぼっていた。

ジェニィは寡婦小屋へ入れられた。そこには、連れ合いを亡くして年齢的にも新たな繁殖を望めない女や、労働力にならない老人が収容されている。手ごろな男と番わせて新たな労働力を産ませることもできる年齢のジェ

ニィをわざと寡婦小屋へ入れたのは、所有者に特別の思惑があったからだろう。

「まあ、奥様……！」

寡婦小屋の一同——三人の女と四人の老人は、ジェニィの惨めな姿に息をのんだ。初老の女が寝藁に敷いたシーツをつかんで、ジェニィに着せ掛けた。

「お召し物を……いえ、それよりも……ミラ、お湯を沸かして。身体を洗っていただかなくては」

「そんなに気をつかわないで。わたしは、もう奥様ではないのよ。あなたたちと同じ身分なのだから」

「とんでもねえこってす」

初老の女が大仰に手を振った。

「奥様は奥様です。ご主人様の連れ合いでなくなっても、白人でなくなっても……奥様に受けた御恩を忘れるもんじゃないです」

「御恩だなんて、そんな大げさな……」

「ちっとも大げさじゃねえです。このモリス



なんか」

女は、桶を持って水汲み場へ行きかけている隻眼の老人を振り返った。

「奥様が薬を差し入れてくれなかったら、両眼ともつぶれとりました。隣の小屋にいるサムだって……」

「ほんとうは、その場でチャールスを止めなければいけなかったわ。わたしに勇気がなかったから。せめてもの償いなの」

ジェニィは悲しそうに、小さな声で女の言葉さえぎった。勇気がなかったのではない。チャールスに諫言すれば、いっそう激昂させるだけだから、黙って見ているしかなかったのだ。けれど、奴隷への過酷な懲罰を夫にやめさせられなかったのは、妻である自分にも責任があったと――ジェニィは本気で考えていた。

ジェニファー奥様をほめたたえれば、かえって苦しめることになる気づいて、女は口をとぎした。奥様は、できる限りのことをし

てくださったのだ。今度は、自分たちができる限りのことを奥様にして差し上げる番だった。

ジェニィは十日ぶりに身体を洗って、女たちから譲ってもらった柔らかな衣服に身を包んだ。

――翌日から、ジェニィも労働に駆り出された。といっても、労働力とはみなされていない寡婦小屋の住人に課せられる仕事の量は、たいしたものではなかった。夫婦で農園に出ている世帯の世話（洗濯、水汲み、薪割り、子守など）、共同便所の清掃、ささやかな菜園の手入れ。

労働量が少ないぶん、支給される食糧も少なく、農園内でだけ通用するトークンは与えられなかった。日用品は、彼女たちが世話を引き受けた奴隷の世帯からもらう謝礼でまかっていた。

ジェニィには、彼女の労働に見合う分よりは多めに食事も衣服も分配された。断わって

はかえって相手を悲しませると考えて、ジェニィはすなおに好意を受け容れた。しかし、奥様と呼ばれることだけは断固として拒否したのだった。

惨めであってもそれなりに安らげる環境に母親が落ち着いたのに比べて、娘のエレンは折檻小屋に監禁されていたとき以上の悲惨な処遇に甘んじなければならなかった。

繁殖小屋には、交配年齢に達しながら番を作らない者たちが集められている。女なら、器量や意地が悪く体格も貧相な者。男は粗暴な者が多い。新しく買われてきた若者も、この小屋に入れられる。

エレンは、繁殖小屋にはもっともふさわしくない娘だった。交配しようにも、そこは鎖でとざされているのだから。しかも彼女は父親に感化されて、奴隷たちに高飛車な態度で接してきた。同じ身分に墮とされた彼女に同情する者は皆無だった。エレンは誰からも衣

服を与えられることはなく、素裸に鎖を巻いた惨めな姿で労働に追い立てられた。

若者たちにあてがわれている仕事は、新たな農地の開墾だった。灌木を切り払い草を刈り、岩や石を掘り起こして何マイルも離れた谷へ捨てる。一日に男は四十平方ヤード、女は三十平方ヤード（約二十五平方メートル）の開墾を義務づけられていた。

早朝から若者たちは土木作業具や一輪車をたずさえて、農園の端まで一マイル以上を歩いて荒野へ出かける。ほかの者にはどうということのない移動が、すでにエレンには苦行だった。チャリチャリと鎖を鳴らしながらへっぴり腰で歩く一步ごとに、南京錠が内腿をこすった。足の踏み出し方によっては、鎖に肉芽をこすられて不本意な快感に悶えるか、不意打ちの打撃に苦悶するか、どちらにしても歩みが乱れた。

奴隷監督が荒れ地に杭を打って、一人ずつにその日の開墾場所を割り当てる。奴隷監督

ににらまれている者は、灌木が茂っていたり大きな岩が転がっている場所にまわされた。

最初の日のエレンが割り当てられたのは、まさにそういうところだった。エレンは鎌を振るって枝を払ったが、剥き出しの肌を枝で傷つけられるたびに手が止まったので、いっこうにはかどらなかつた。ざっと枝を刈ると、地面に座り込んで鋸で細い幹を切る。そのささやかな休息が終わると、ツルハシや鍬とシャベルで根を掘り起こす。生まれて初めての力仕事に、エレンの腕はすぐ動かなくなった。それでも、どうにか灌木の最初の本を片づけて、枝や根を抱えて集積場所へ運ぶ。

「なにを上品なこと、やってるんだ。もっと持て」

枝を運ぼうとしたエレンをデューズ配下のティモシーが怒鳴りつけた。

エレンは両腕の枝を下に置いて、倍ほどの量を持とうとした。

「馬鹿野郎、ほかの連中を見習え。身体で抱

えるんだ」

たしかに、誰もが抱えられるだけの量を選んでる。でも、それは服で体を保護されているからで……

ヒュン！

ティモシーが巻き鞭をほどいて宙に振った。

エレンは枝の山におおいかぶさるようにして、両腕で抱えた。乳房にも腹にも枝の先端がチクチク突き刺さる。それをこらえて、エレンは枝の山を持ち上げた。

「ひゃ……」

身体を起こした反動で鎖が揺れて、肉芽に正面からぶつかった。エレンはまた前かがみになって、枝の山を取り落してしまった。

ヒュン……パシッ！

巻き鞭が背中を打った。懲罰ではなく、馬を走らせるために鞭打つと同じ軽い打ち方だったが、エレンに屈辱を与えるにはじゅうぶん過ぎる鞭だった。

エレンは枝の山を抱えなおした。持ち上げ

ると、股間の刺激を意志の力でねじ伏せて、集積所まで運んだ。そして、つぎの灌木に取りかかった。

午前中にエレンが均した土地は三十平方ヤードの半分どころか、五平方ヤードがやっとだった。それだけで疲れ果てて、休憩の合図とともにへたり込んでしまった。

誰もエレンに衣服を恵んでくれないのなら、自分で購わなければならない。そのためにはノルマを達成してわずかなトークンを稼がなければならないというのに、この調子ではトークンどころか懲罰に食糧の配給を削られてしまう。

「手伝ってやろうか？」

楽な場所を割り当てられて、午前中だけで七割以上を開墾しているラルフが、肩で息をしているエレンの前に立った。

「十平方ヤードくらいなら、やってやるぜ」

「ほんとうですか？」

エレンは疑わしそうな目でラルフを見上げ

た。自分にわずかでも好意を抱いている奴隷はいないと、彼女は信じている。

「ほんとうだとも。おまえさんの弁当を俺に  
くればな」

硬い小さなパンと茹でたジャガイモに一切れの干し肉。白人娘のエレオノーラだったら、そんな餌のような食べ物は投げ捨てていただろう。けれど、その餌だけが、彼女の空腹を満たしてくれる唯一の食事なのだった。

(でも、断わってしまえば……)

ノルマを達成できずに、明日の食糧を削られる。トークンももらえない。

「お弁当は差し上げます。だから、手伝ってください」

まさかお礼を差し出してまで奴隷にお願いをすることになるなんて……エレンは、背中を鞭打たれたよりもずっと惨めな思いを噛み締めていた。

午後からの作業を、エレンは必死になって頑張った。肌が傷つこうと、鎖が股間にぶつ



かろうと、それを無視しようとした。空腹は――二時間も働いていると忘れてしまった。それでも、午後に切り拓いた土地は十平方ヤード足らず。ラルフが杭の反対側から拓いてきた十平方ヤードとの間に、五平方ヤードの茂みが残った。

仕事の終わりに、奴隷監督が全員を並べさせた。木の板にナイフで印を刻みながら、出来栄えに応じたトークンを渡していく。白人労働者が稼ぐ金額の十分の一にも満たない、農園内でしか通用しない疑似貨幣。エレンがそれをもらえないことは、はっきりしている。

（せめて……鞭打ちだけで済ましてほしい）

エレンは生まれて初めて、鞭打たれることを心の底から願った。食糧を減らされるのだけは勘弁してほしかった。

「仕事が終わらなかったのは、おまえだけか」

ティモシーは腕を突き出すと、エレンの乳首を指でぴしっと弾いた。

「ごめんなさい……」

エレンは胸をかばおうともせず、うなだれている。

「使えないお嬢様だな。まあ、初日でもあるから……懲罰は、これだけだ」

もう一度乳首を弾いてから、ティモシーは木の板に刻みを入れた。

「ありがとうございます」

エレンは本心から感謝の言葉を口にした。これで、明日はちゃんとした食事になりつける。トウモロコシ粥だろうとぼそぼそのパンだろうと、虫食いのジャガイモや豆でも、二本の生トウモロコシに比べればすごく贅沢な食事だ。しかも肉まで口にできるなんて夢みたい。すくなくとも食べることに限っては、すっかり奴隷根性に染まってしまっていた。

小屋へ戻るとすぐに、女たちは夕食の支度にとりかかった。牛の内臓と豆をケチャップで煮込んで、スパイスで味をととのえる。食欲をそそる匂いが小屋に満ちた。疲れ果てて壁際にうずくまっているエレンにとって、そ

れは苦痛を伴わない拷問の時間だった。

男九人と女七人が、小屋の真ん中に据え付けられたテーブルを囲んだ。エレンはうずくまったまま、自分もテーブルについてよいのか躊躇していた。

「ほんとは、あんたにやる食事なんかないんだよ」

女をまとめる姐御格のキャスが、エレンの前に立った。

「それじゃ可哀そうだし、倒れられちゃこっちにも迷惑がくるから、恵んでやるよ」

置かれた鍋の中には豆と煮汁が残っていた。そこにパンが放り込まれた。

「まさか、ステーキが食べたいなんて言いもしないだろうね」

「ありがとうございます」

キャスの敵意は無視して、好意にだけお礼を言った。それから立ち上がって、テーブルに向ってきちんと礼の言葉を述べた。

「皆様のお恵みを感謝します」

見下していた奴隷に対してへりくだること、エレンはまったく屈辱を感じなかった。

今日の朝は茹でトウモロコシだけだったから――破瓜の夜の御褒美のハムを別にすれば、まともに味のついた料理を口にするのは十日ぶりだった。スプーンで豆と煮汁を掬って食べ、パンを細かくちぎって鍋がピカピカになるまで煮汁を拭き取った。

食事の後片付けは、エレンひとりに押しつけられた。十六人分の食器を洗うだけでもひと仕事だったが、ひさしぶりに空腹を満たせたエレンには苦にならなかった。

水汲み場の脇で洗った鍋と食器を籠に入れて、すでに真っ暗になった小屋へ戻って。エレンは立ちすくんだ。小屋の壁に沿って敷かれた寝藁の上に四組、テーブルの下に一組。暗闇の中で男女が重なって蠢いていた。

「やあん、もっとやさしくして……」

「あっ、あっ、あんっ……！」

「とろけそうだよ、ハニー」

「まだだよ。あたい、まだちっとも……馬鹿！  
早過ぎる！」

それは、初めて目にする光景ではなかった。  
幼い時にも一度、性に関心を持つようになってからは何度か、こっそり覗き見た奴隷たちの交尾だった。しかし、これほどはっきりと、しかも彼らと同じ側に立って目撃すると、受ける衝撃の度合いがまるで違っていた。

エレンは物音を立てないように注意して、  
食器籠と鍋を台所へ戻した。それを待っていたかのように、背後から抱きつかれた。

「お嬢様だったわりには、けっこう図太いじゃねえかよ」

弁当と引き換えに仕事を手伝ってくれたラルフだった。

「明日は弁当なしで手伝ってやってもいいんだぜ？」

両手で乳房を揉み立てながら、首筋に唇を這わせてきた。

乳房を虐められるのにはすこしだけ免疫が

ついてきたエレンだったが、肌を舐められることには慣れていない。生暖かくぬめぬめした感触に総毛立った。

「やめてください」

ささやくような声で抗議しながら、身体をひねってのがれようとした。が、ラルフのがっしりした腕に押さえこまれて動けない。

「なにも、やらせろってんじゃねえ。できねえしな。ちょこっと触らせてくれて、手で抜いてくれるだけでいいんだ」

ラルフは胸をもみながら、膝頭を腿の間にこじ入れてきた。

「やめてください。いやです」

もしも単純に迫られたのだったら、たとえ力づくで襲われたとしても、エレンはそんなに抵抗しなかったかもしれない。肝心の部分は鎖で護られているのだし、実の父親に凌辱されて穢れた身体だ。乳房を慰まれようと手でペニスをしごかされようと――今さらだった。どころか、父親の子供を孕まされるより

は、黒人奴隷の子を孕むほうがましでさえあった。

しかし、ラルフは交換条件を持ちかけてきた。エレンに身体を売れと言っているも同じだった。それは、少女にかろうじて残されたプライドを踏みにじる行為だった。

「やめてったら……誰が、あんたなんかに！」

もがいた拍子に、がつんと頭に衝撃があった。とたんに、エレンをつかまえている腕の力が抜けた。

「うるせえなあ」

パシュッとマッチが擦られて、蠟燭が弱い炎を立てた。口を押えてエレンをにらみつけている大柄な男の顔が照らし出された。エレンの頭が彼の顎を下から突き上げて、不運にも舌を噛ませたらしかった。

「すまねえな。もちっと静かにやるからよ」

言うと同時に、ラルフは少女に飛び掛かった。

「きゃ……やめ、むぶ……」

エレンは男に組み伏せられて口を掌でふさがれた。

「人が親切で言ってやってるのに、その返事がこれかい。黒人なんかにやさわれるのもいやってか。いつまでも白人づらしてんじゃねえぞ」

「むううう……」

それは誤解です。あたしも黒人だって、もう自覚しています。エレンはそう言いたかったのだが、言葉を封じられていた。必死にかぶりを振っても、男をいやがっているようにしか見えなかった。

「くそつたれ。この牝犬めが。こうなったら……」

ラルフはエレンに馬乗りになって、左手で後ろをさぐった。秘裂をとざしている鎖をつかんで、力まかせに引き上げた。

「むぶうううっ……！」

凄まじい痛みにもエレンの腰が浮いた。内側の粘膜を鈍器で割られるような――ぎりぎり



と身体の奥底まで浸透する激痛だった。

剥き出しの肉芽がゴリッとひしゃげて鎖の環から抜け出た。

「いやあああっ！」

男の掌を噛み破って、エレンは絶叫した。

「このガキ！」

ブン……耳元に唸りが聞こえたつぎの瞬間、エレンは左の頬に衝撃を感じていた。口の中に血の味が広がった。

ラルフは後ろ向きになって少女の顔に尻を落とした。鎖を持ち上げて揺すりながら、横へずらそうと試みた。

「むうう……んぶっ！」

筋肉の塊のような尻に悲鳴が押しつぶされる。エレンは両手で男の尻を持ち上げて顔をそむけようとしたが、びくとも動かなかった。

「くそったれ！」

どうやっても秘裂に喰い込む鎖を出し抜けないとわかって、ラルフは立ち上がった。エレンの髪をつかんで上半身を起こさせた。

エレンの目の前に、黒光りする肉棒が突きつけられた。まだ水平にしかなっていないが、それでもチャールスのよりは太くて長かった。「おら！ 口を開けろ。噛むんじゃねえぞ、歯をへし折るからな」

亀頭が唇に押しつけられた。エレンは観念して口を半開きにした。焼けた鉄杭のような肉棒が、ぐぼっと押し入ってきた。それは、強姦そのものだった。

口中に男の物を含んだ経験は一度しかない。それも、射精直後の跡始末だった。口を生殖器官の代用に使われるのは、これが初めてだった。

ラルフは、少女が抵抗しないと知ると両手で頭をつかんで押さえつけ、荒々しく腰を動かし始めた。喉の奥まで一気に突っ込んで、雁首が歯の裏側に当たるまで引き抜く。

鼻をつく異臭と喉への刺激でエレンは吐き気に襲われながら、されるがままになっていた。

(早く終わらせて……)

それだけを願っていた。

(逆らっても暴力で従わせられるだけ)

主人でもない、奴隷という同じ身分の男に屈服させられるのは屈辱だった。

(悪いのは……あたしなんだろうな)

この男は、今夜の相手にあぶれたから自分を襲ったのではないだろうと——エレンは口腔を犯されながら、ぼんやりと思った。奴隷を虐めてきた高飛車な似非白人娘への復讐なんだろう。

もしかしたら。十六分の十五までは白人の血を引いている女の肌に劣情を掻き立てられているのかもしれない。でも交尾はできないのだから、そのうち興味も失せるだろう。それまでは——そこまで考えて、エレンはぞっとした。この小屋には九人の男がいた。

喉の奥に熱い滾りを叩きつけられて、エレンはむせた。

「吐き出さずに飲めよ」

粘っこいような、ざらついたような——味が麻痺して、えぐみしか感じない不快な舌触り。それでも男の暴力が怖くて、エレンは吐き気と闘いながら嚙下した。

男は、跡始末まで口でさせるような手間はかけなかった。エレンの長い金髪を手に掬い取って、それでおのれの逸物をぬぐった。

(……髪を洗わなくちゃ)

そうは思ったが、立ち上がる気力も体力も失せていた。エレンはそのまま、土間に身体を横たえた。股間の鈍い痛みだけは、クリトリスを鎖の環の中に押し込んで解消しなければならなかった。環に押し下げられて包皮が剥けてしまうのは、どうしようもなかった。

——泥のような眠りは、便意で破られた。十日ぶりにありついた、まとまった量の食事は、豆が主体だった。おなかが張って苦しかった。

エレンは小屋を出て共同便所へ行った。粗末な囲いの中に並べられたベンチ。足元は蹴

込み板でふさがれ、座面には丸い穴が開いている。その穴に尻を嵌め込んで、星が消えようとしている空を見上げながら、エレンは排便した。終わると足元の箱から藁を取って、鎖の上から汚れを拭いた。

(見つかったら、怒られるかもしれないけど……禁止されてもいないよね)

水汲み場へ行って、桶に汲んだ水を掛け流しながら鎖の中まで洗った。

小屋へ戻ると、早くも一日が始まろうとしていた。エレンは水汲みを割り当てられた。力仕事は男の分担のはずだったから、そこにも彼女への憎悪が見え隠れしていた。

まだ陽が昇らないうちからの朝食は、昨日と同じ茹でトウモロコシ。大皿に盛られたマッシュポテトとスクランブルエッグはトークンで買った食材なので、エレンへの分け前はなかった。ただし、またエレンひとりに押しつけられた食器洗いするとき、残り滓を指で搦り取って食べても文句は言われなかった。

太陽が水平線を切ったときが、一日の始まり。奴隷監督の点呼を受けて、倉庫から道具を取り出して、エレンたちは開墾地へ歩き出した。

居住区画を仕切っている柵の手前で、エレンの足が止まった。洗濯物を抱えた女たち。その中に母の姿があった。ジェニィは棒立ちになって、まだ衣服を与えられていないどころか肌のあちこちに擦り傷や切り傷を作っている娘の姿を、驚いているような悲しんでいるような目で見つめていた。

「立ち止まると、監督にどやされるぞ」

すぐ後ろを歩いていた小柄な男が、追い越しながらエレンの尻を軽く叩いた。叩いたついでに、ぺろんと撫でる。その様子も、ジェニィは目撃していた。娘が仲間からどういうふうに使われているかを察したのだろう。後ろ姿を見送る目に、悲しみの色が深まった。

四十分をかけて農園の端まで辿りついてから開墾の終わった土地を十分ほど歩いて、よ

うやく今日の作業場所へ到着する。エレンに割り当てられた新しい三十平方ヤードは、それほど悪い条件ではなかった。しかし、昨日の残り五平方ヤードは灌木の茂みだった。午前中の半分以上を食われて結局、二十五平方ヤードが午後の仕事として残った。

「また、弁当と交換で手伝ってやろうか」

ラルフが、なれなれしく腰を抱き寄せて耳元でささやいた。

「弁当はいらないって、言ったじゃない」

あれだけのことをしたのだから、手伝ってくれるのが当然だとエレンは思っていた。

「手伝いはいやだって言ったのは、おまえさんだぜ？」

「でも、あたしを……ひゃんっ！」

鎖に扼された肉芽の先端を指の腹でくじられて、快感と苦痛のないまぜになった衝撃にエレンは言葉を封じられた。

「どうするんだよ？」

「約束を守ってくれない人は、信用できません

ん」

エレンは心を励まして、ラルフの交換条件をはねのけた。

「自分の責任は自分で負います。ほっといてください」

ラルフは鼻をふくらませた。せっかくの親切な申し出を白人氣取りの小娘に断わられて、気分を害したようだった。

「……好きにしな」

吐き捨てて、ラルフは小娘を突き放した。

エレンは自分の弁当を急いで食べて、休憩の終わらないうちから作業に取りかかった。けれども、半時間やそこらで取り返せる遅れではなかった。十平方ヤード以上を残して、日没の一時間前——作業を切り上げる刻限がきてしまった。

「また、おまえだけか……」

監督のティモシーが巻き鞭をほどいて、両手でびいんと張った。

(……………)



エレンは、わざと黙って突っ立っていた。赦しを乞ったところで、鞭打たれるときは鞭打たれる。奴隷として家畜並みの扱いに甘んじるのだから……家畜は弁解なんかしない。「ちょち待ってよ、監督様あ」

エレンと同じ年のリサが、ティモシーの腕にとりすがった。

「こいつの残りは、明日みんなで手分けするからさ。監督様に迷惑はかけないから、目をつぶってよ。したら、監督様の好きな縦笛を吹いたげるからよ」

一か月の単位で予定の仕事が片付かなかつたら、農園主のチャールスは奴隷監督の責任を問う。奴隷監督は部下を叱咤して、部下は奴隷を厳しく罰する。そのとき、エレンという奴隷の不始末は繁殖小屋全体の不始末として処罰される。

そうなればもちろん、エレンは繁殖小屋のみんなから憎まれるし、疎まれもする。けれど、すでにそうになっているエレンには、失う

ものなど何もない。エレンがノルマを達成できなければ、困るのは繁殖小屋の奴隷たち全員なのだった。

「縦笛が好きなのは、おまえのほうだろうか？」

ティモシーは巻き鞭の柄でリサの股間をえぐった。

「やあ……ん。これは嫌い。監督様のが好きなんだからあ」

(奴隷と馴れ合う監督なんて……)

こういう人間が奴隷をつけ上がらせるのだと腹立たしく思ってから。自分はその奴隷の立場なのだと思い出した。エレンは未だに、おのれの境遇と内面の倫理との葛藤に折り合いをつけられないでいる。

エレンは鞭打ちをまぬがれた。食糧の配給も削られずにすんだ。しかし、その代償は払わなければならなかった。

夕食までのひととき。女たちは手分けして食事の支度にいそしみ、男たちは思い思いに

時をつぶす。エレンは、開墾地から持ち帰った枝を薪に選り分けていた。そこへリサが帰ってきた。

「ちょっち来なよ」

エレンの腕を引っ張って小屋へはいり、寝藁の上へ突き飛ばした。スカートをたくし上げ、エレンの顔を跨いで腰を落とした。下穿きは着けていなかった。濃いチーズとアンモニアの入り雑じった臭いがエレンの鼻をついた。

「あんたのために身体を張ったんだからね。跡始末くらいはしてもらおうよ」

白濁に汚された股間をエレンの口に押しつけた。

密生した剛毛をかき分けるようにして、エレンは秘裂に舌を這わせた。彼女なりの思惑があったとしても、リサが身体を投げ出してエレンをかばってくれたのは事実だ。リサの要求は拒めなかった。

ぴちょ、ぺちょ……エレンは嫌悪と禁忌の

念をおさえて、白濁を舌先で掬い取っていった。女からの分泌物も多分に混じっているのだろう。チャールスの精液をじかに舐めたときよりも、とろっとした舌触りだった。味は……わからなかった。息を止めていてさえ、不潔で淫雑な臭いが喉の奥まで染み込んで、気分が悪くなった。

「ひゃあ……！」

叫んだ拍子に、エレンは口に溜まっていた汚物を飲みこんでしまった。痛いようなくすぐったいような鋭い感覚が、股間から背筋を突き抜けたのだ。おしっこを漏らしそうな快感。

「口を動かしてるだけじゃ退屈だろ。飯の時間まで遊んでやるよ」

フォークの先だろうか、鋭く冷たい物でクリトリスをちょんちょんとつつかれた。つつかれるたびに、エレンの腰がぴくんぴくんと跳ねる。

「俺も遊んでやるよ」

むぎゅっと乳房をつかまれた。さらに男どもが群がってくる足音。手足を押さえつけられて抵抗を封じられた。乳首をつままれ、内腿をくすぐられた。

「はぶうう……」

叫んだはずみで、エレンはリサの股間をおもいきり頬張る形になってしまった。

「舌を止めるんじゃないよ」

リサが腰を揺すってエレンをうながす。何人もの男たちに身体を弄ばれながら、エレンは舌を動かした。

リサが腰を上げて、エレンへの弄虐はやまなかった。白人にしか見えない少女は、黒い肌の男たちにとって性的な悪戯の対象であり、同時に報復の標的でもあった。

「いやあ……痛いっ……やだ、きゃは……ひいいい」

硬く勃った肉芽から快感を迸らせ、乳首をつねられて痛みに叫び、あちこちをくすぐられて悶えのたうつ少女。

「お願い……もう、やめてください。お願い……虐めないで」

訴えるエレンの口を、逆しまにおおいかぶさってきたラルフがふさいだ。

ヒュウヒュウと口笛が鳴らされる。

「監督のチンポ汁を舐めた口だぜ」

「そんなんじゃないくて、おまえのコックをぶち込んでやれよ」

「うっさいな。あたしだって、あいつのチンポ汁を舐めてんだよ。それとも、サミイ……あたいともキスしたくないってのかい？」

ガンガンガン……不意に鍋が打ち鳴らされた。

「お遊びは終わりだよ。とっとと飯を食らいな」

キャスが不機嫌そうに腰に手を当てていた。新入りの娘に群がる男どもに愠気を焼いているのか、男どもを惹きつける白人（もどきの）娘に嫉妬しているのか。

「あんたもテーブルに就きな。パンと豆は、

あんたの稼ぎだ。だけど、肉を取るんじゃないよ」

後者らしかった。

夕食が終わると、早々に灯りは消される。鯨油で作られた安物の蠟燭でも、奴隷たちにとっては貴重な財産だった。暗闇の中で食後のひと休み。しだいに男と女が寄り添って、そこそこで交尾が始まる。

ボタンとドアが開けられて、暗闇の中の蠢きがぴたっと止まった。

「裸のお姫様、王様がお呼びだぜ」

どきんと……エレンの心臓が躍った。

(もう……いやだ！)

父親に犯されることへの罪の意識。女体のもっとも敏感な器官に加えられる拷問。女体のもっとも恥ずかしい部分を弄ばれる屈辱。エレンはデューズに聞かれないよう、そっとため息をついて従順に立ち上がった。

「あ……」

一歩を踏み出して、鎖の環が肉芽をこす  
るのを強烈に意識した。刺激に慣れたとはいわ  
ないけれど、受け流して意識から締め出すこ  
とで折り合いをつける術を身につけていたつ  
もりだったのに――今は、まったく役に立た  
なかった。エレンはやけくそ気味に、しゃん  
と腰を伸ばして歩いた。余った鎖の端が肉芽  
の先端にぶつかった。

(痛い……でも)

一歩ごとに官能を掻き立てられて、はした  
ない蜜を搾りだされるよりは、そのほうがま  
しに思えた。

ランプというランプがともされ臨時の灯り  
まで持ち込まれた、豪華な拷問部屋。エレン  
は二日ぶりに鎖の貞操帯から解放された。そ  
れは、凌辱者の前で完全な無防備にされた  
ということだった。

一週間前と同じように、エレンは洗い桶の  
ぬるま湯に浸かった。ボディブラシでゆっく  
りと身体をこする。枝の先や草の葉に引っ搔



かれた傷が痛むけれど、垢にまみれた身体をきれいにしたいという欲求も強かった。

チャールスはガウンを着たまま牝奴隷の白い肌を眺めて、ちびちびとバーボンをストレートで嘗めている。これまでの二回が性急に過ぎたと反省して、今夜はじっくりといたぶるつもりらしい。

身体を洗い終えたエレンを立たせて、その首に鎖を巻いた。貞操帯に使っていた鎖だ。少女の手首をぎりぎりとは後にねじ上げた。「痛い……あたし、けっして逆らいません。ですから……縛らないでください」

エレンの哀願もむなしく、手首が肩甲骨のすぐ下で鎖に絡め取られた。肩がはずれそうなほど痛かった。首を絞められて、のけぞらなければ息が詰まった。

命じられて、エレンはベッドに仰臥した。身体の下になった手首が痛かった。エレンは膝を立てて腰をわずかに浮かし、手首にかかる体重をやわらげた。バランスをとるために、

脚が自然に開いてしまう。男を迎え挿れる姿勢で、じっと凌辱の時を待つ。が、チャールスはシェービングカップで石鹸の泡を立て始めた。

(……そうだった)

かつてメグを素裸に剥いたときの光景がまぶたによみがえった。グレイ家の当主は牝奴隷を抱く前にその毛を剃ってしまうのだった。すでにエレンの股間は、八分の一インチ（三ミリ）ほどの金色の針がまばらに萌えていた。

エレンの腰すれすれに尻を持ってきて、チャールスがベッドに腰掛ける。自然とエレンは目を閉じていた。

しゃっしゃっと、下腹部にシャボンが塗りとくられる。

「くふ……」

ブラシの毛先がくすぐったくて、エレンはわずかに腰をくねらせた。が、冷たい金属を肌に押しつけられると、動きがぴたりと止ま

った。

斜めに寝かされたナイフの刃先が、肌に喰い込むようにして滑っていく。押しつぶされた肌の厚みだけ深く、金色の針が刈り取られていった。

「あ……？」

不意に指で穿たれて、エレンは二重に戸惑った。だいいちに、チャールスの企みがわからなかった。彼の手元が狂うか自分が腰を動かすか、どちらにしても鋭利な刃先は肌を切り裂くだろう。そして、もうひとつ。ほとんど痛みもなくするりと指を受け挿れてしまうほどに、自分は肉穴を濡らしていたのだろうか。

(違うわ。シャボンのせいだわ)

エレンは自分に嘘をついてしまった。

ぐうっと指で内側から下腹部を持ち上げられて、その上をナイフが滑った。

「ん……」

焼印で盛り上がった肉をこすられて、痛み

とくすぐったさの両方を感じた。そこにはまだ薄皮が張っているだけだった。

下腹部の処置が終わると、膝を立てて脚を開かされ、鼠蹊部を剃られた。最後には四つん這いで肛門のまわりまで剃毛された。

完全に無毛になった下腹部に、横長のハート形に囲まれた S L A V E の文字。それを指でなぞり、一文字ずつ発音してエレンに聴かせるチャールス。表情を変えずに天井を眺めているエレンに小腹を立てて、そこをぴしゃんと叩いてからチャールスは裸になった。

「おまえも、もう三回目だ。なにをすればいいか、わかっているな？」

チャールスは自分の腕を枕にして、ベッドの真ん中にごろんと仰向けになった。意図的に興奮を醒ましているのか、微酔にあおられていた硬直が、しだいに萎えていく。

(早く終わらせてしまおう。でも、ご褒美のハムはほしいな)

エレンはベッドの上に起き直った。膝で歩

いてチャールスの腰に近寄り、お尻をうんと後ろに突き出してバランスをとりながら上半身を倒していった。

「くう……」

顔をうつむけると、自分で自分の首を絞めてしまう。エレンは思いきり息を吸い込んでから、チャールスの股間に顔を伏せた。ぱくっと上から啜えて、舌で亀頭を持ち上げるようにして口に収めた。きゅろんとした感触は、温めた腸詰ソーセージに似ていた。

ソーセージにはない張り出した部分を、エレンは舌でぐるりと舐めた。唇をすぼめて歯を立てないようにしながら、上半身全体を揺すって肉棒をしごいた。たちまち肉棒が、太く硬く長くなっていく。

（ふふん……単純ね）

犯されるための準備をさせられているという状況を忘れて、エレンは自分がこの男を支配しているような錯覚にとらわれた。しかしそれは、居心地の悪い錯覚だった。

エレンは身体を起こして、男を跨いだ。鎖に首を絞められながら自分の股間を覗きこみ、天井に向かって屹立した男の先端を狙って腰を沈めていく。が、いくら硬直していても、ペニスは地面に打ちこまれた杭ではない。亀頭は秘裂に沿ってするりと逃げた。

エレンは、さらに大きく脚を開いた。花卉がぱっくり割れるのが、自分でわかった。さっきとは角度を変えて、慎重に膝を曲げていった。滑って逃げようとする亀頭を追いかけて、エレンは腰をずらした。今度は、うまく花卉に包みこめた。が、穴に迎え挿れようとする肉棒がくしゃんとした。

百戦錬磨の女なら、そこで腰をくねらせたり秘唇を押しついたり、その場で硬直を取り戻そうとしただろう。しかしエレンは、男を勃起させる方法をひとつしか知らなかった。身体的位置を変えて、ふたたび男を頬張った。

ぴちゃ、くちゅ……

極限まで男を硬くさせようとしてエレンは

熱心に舐めまわし、吐き気をこらえて喉の奥まで迎え挿れた。そしてふたたび男を跨いで――悪戦苦闘しているうちに、萎えさせてしまった。

(悔しい。馬鹿にされてるみたい……)

エレンにまだ残されていた勝ち気な一面が頭をもたげてくる。三度、エレンはチャールスを口に挿れた。

ぐちゅぐちゅ……ずぞぞーっ……

ふと思いついて、跡始末でやらされていたように肉棒を吸いながら、わざと唇を緩めてみた。空気の振動が肉棒にまで伝わって、これまでにない怒張を示した。

(うん、これなら……)

エリイは勇んで男を跨いだ。が、腰を落そうとして、そのまま凍りついた。チャールスが、枕の下から忌まわしい小道具を取り出したのだ。

くりっと肉芽が剥かれた。平常時でも先端はわずかに顔を覗かせていたし、この二日間

は鎖で強制的に剥かれていた。そして今。性感はなくても、行為そのものに興奮して勃起していた。包皮を剥かれる痛みはまったくなかった。にゆるっと皮を押し下げられる刺激だけで、鋭い快感が背筋を翔けあがった。

「いやあ……赦してください！」

しかし悲鳴は、恐怖の響きに満ちていた。なぜ、そこを剥かれたのか。なぜチャールスが洗濯バサミを手をしているのか。最初の日  
の記憶が、鮮明な悪夢としてよみがえった。エレンは歯をカチカチ鳴らしながら、しかし逃げられなかった。逃げれば懲罰を追加されるだけだ。

「ひ……い、いや……」

エレンは洗濯バサミに呪縛されて、視線をそらせられない。洗濯バサミが大きく口を開いて、包皮を押し下げた指の間からぴよこんと突き出た肉芽にかぶさって……

「ぎゃあああああっ……!!」

エレンは、断末魔の猛獣のように吠えた。



最初の日は、洗濯バサミがこんなふうに使われることを知らなかった。不意打ちだった。驚愕に悲鳴を奪われていた。しかし、今日は——この数秒でエレンの中に膨れあがっていた恐怖が、激痛とともに弾けた。

「そら、ここだ」

洗濯バサミが引っ張られる。

「い、痛い痛い……！」

エレンは引っ張られる方向へ腰を突き出して沈めた。

ぬぶっと……股間を肉棒が貫いた。前の二回とは違って、拍子抜けするほど簡単に収まってしまった。

「そら、腰を動かせ」

洗濯バサミが引き上げられ、それを追ってエレンの腰も宙に浮くと、今度は下へ引っ張られる。

「痛い……ちゃんと動かすから……いやあ、もう引っ張らないで」

エレンは泣き声で慈悲を乞いながら、洗濯

バサミに操られて腰を上下に振り立て、左右に揺すった。

ずぬっ、ずぬっ……ずっぷ……ぐじゅっ、ぐじゅっ……エレンの苦痛には関係なく、エレンの花芯は刺激を受けて濡れていく。

「うああ……もう赦して……痛い……」

エレンの哀訴をあざ嗤うように、洗濯バサミの動きがだんだん早くなっていた。

じゅぶじゅぶじゅっぷ……エレンの身体が男の腰の上で弾む。

「ううむ。ぎゅんぎゅん締めつけてくるぞ。これは、たまらん……」

チャールスは蕩けそうな表情を、わずかにしかめた。

ふっと洗濯バサミの動きが止まった。痛みが軽くなった。ほうっと息を吐いて、エレンは結合部に視線を落とした。

「え……？ ひっ……！」

洗濯バサミは、まだそこにあった。絞り出された肉芽の先端が白く変色していた。痛み

がやわらいだのではなかった。血流をさえぎられて、感覚が麻痺しているのだった。

(あたしの……腐り落ちちゃう！)

そのほうがいいのかもしれないと、一瞬思った。耐えられない苦痛を生み出す器官なんか、自分にはいない。

しかし、耐えられない苦痛を生み出す器官はクリトリスだけではなかった。

チャールスは、また枕の下から洗濯バサミを取り出した。しかもふたつ。それを両手に持って、硬くしこっている乳首をつついた。

「蕾で引きずるのは勘弁してやろう。これを、ここにぶら下げるのなら、だが？」

「おお、ご主人様。これ以上あたしを虐めないでくだ……ひっ！」

股間の洗濯バサミをチャールスが手にしている別の洗濯バサミで叩かれて、エレンは言葉を詰まらせた。

「選ばないのなら、この洗濯バサミをつけたうえで蕾を虐めてやるぞ」

「それを乳首につけてください」

エレンは即答した。クリトリスをこの苦痛から解放してもらえるのなら、どんな条件だって承知していただろう。

「よし、すなおな牝だな」

洗濯バサミの口が凶悪に開いて、左右から乳首に噛みついた。

「くうう……」

痛かったが、叫ぶほどではなかった。これくらいなら平気だとエレンは思ったのだが。甘かった。

じゃらっ……チャールスが掌に隠し持っていた鎖が垂れた。

「ひい……！」

鎖の重みに乳首が引っ張られて、痛みが何倍にもなった。

前にのめるエレンの髪をつかんで引き起こし、チャールスは反対側の乳首にも洗濯バサミを噛ませた。

「い、痛い……でも、我慢します」

「ふうむ……四オンス（百十グラム）でも、まったく垂れない。おっぱいが貧相だからかな？」

「お願いします、ご主人様……蕾の洗濯バサミをはずしてください」

「休憩は終わりだ。さっさと腰を振れ」

鎖を引っ張られて、エレンは小さな悲鳴をあげた。

「おっしゃるとおりにします。でも、その前に約束を守ってください」

「約束？」

「はい。蕾で引きずるのを……やめ……」

エレンの声が小さくなって、消えた。洗濯バサミをはずすとは、チャールスは言っていない。エレンが勝手に解釈していただけなのだ。

「僕は、たとえ奴隷相手でも約束は守るぞ。家畜が主人を信頼して忠実に振る舞うなら、主人もそれに応えてやらねばならん。いつだったかな。娘にそんな説教をしたような気が

するが——儂に娘はおらんのだから、記憶違いだな。さあ動け、エレオノーラ」

股間の洗濯バサミをぴしっと弾いてから、チャールスはわざとらしく頭の後ろで腕を組んだ。たしかに、蕾を引っ張ってはいない。

エレオノーラと呼ばれた奴隷娘は悲しそうに目を伏せて。ぐっと膝に力を入れた。腰を浮かせて、それから自分の全体重を下になっている男の上に落とした。ジャラッと乳首から垂れている鎖が鳴って、顔が苦痛にゆがんだ。それでもまた腰を浮かせて、男に股間を打ちつける。

男も、すこしは下腹部に圧迫を感じているのかもしれない。エレンが腰を落とす瞬間には息を止めて腹筋を固めていた。しかし、牝奴隷のきつい肉壺にしごかれる快感はかすかな苦痛を何倍も上まわっている。

自分の中で肉棒がますます固く太くなっていく感覚で、エレンにもそれはわかった。

エレンは動きつづける。ジャランジャラン

と鎖を鳴らして乳首に激痛を注ぎこみながら、男の下腹部に跳ね返される洗濯バサミで肉芽を痛めつけながら、エレンはますます激しく腰を上下に揺すった。背中にねじ上げられた腕までも、少女の首を絞めあげる。

「ひっ……ひっ……くうう……」

それは自分の肉体を犠牲にした、ささやかな意趣返しですらなかった。一分でも早く男を満足させて、この苦痛から解放してもらおうという哀れな努力でさえなかったかもしれない。徹底的に自分を痛めつけることで、自分の境遇を心に刻みつけようという無意識の行為——なのだろうか。しかし、そのような心の在り方そのものが、被虐願望と紙一重の位置にあるということは、少女の理解の範囲をはるかに超えていた。

いつしかエレンは、三点の突起から絶え間なく送りつけられる苦痛にも馴れてしまい、むしろ膝が痛くなってきた。両腕を背後にねじ上げられた不自然な姿で、上体を直立させ

て激しく早く上下させる。一週間前のときのように、手で身体を支えることもできない。負担のすべてが膝にかかっていた。

「ひっ、ひっ、ひっ……うっ、うっ……」

荒い息づかいの合間にくぐもった呻きを交えながら、エレンは膝を屈伸させつづけた。

ぐじゅっ、ぐじゅっ、ぐじゅっ……少女の身体が揺れるたびに結合部から淫らな音が漏れる。官能に追い立てられているのか、それとも苦痛と屈辱に呻吟しているのか。少女の頬を伝い落ちる二筋の涙が、その答えだった。

——単純な上下運動だけではなく。腰をグラインドさせたり、意識的に締めてみたり。二十分ちかい自虐の果てに男を満足させ、みずからの汁と白濁にまみれた肉棒を口唇で清掃して、それからようやく、エレンは洗濯バサミから解放された。よみがえった血流がドクンドクンと突起に流れ込む。エレンは絨毯の上でうずくまって、痛みと痒みをともなった疼きに耐えた。



最後に、目の前に投げ与えられる分厚いハム。エレンはつんのめって顔を絨毯にうずめた姿勢になって、それを食べた。過酷な労働と粗食に疲れきった全身に、たちまち滋養が染み通っていく――と感じたのは、もちろん錯覚だったのだが。

首と腕をつないでいた鎖がはずされて、それはすぐに、汚れたままの股間に装着された。「どうだ、今日は気持ちよかったか？」

チャールスは羽織ったガウンの前をはだけたまま、立たせたエレンに意地の悪い質問をする。

「……………」

どう答えようか。エレンは迷った。痛くてつらいだけだったけれど、正直に言えば不興を買うにきまつてる。でも、気持ち良かったと答えたら……嘘を言うなど、叱られるかもしれない。

「あの……ご主人様に可愛がっていただいて……ご褒美もいただけたし。とっても嬉しか

ったです」

ふふんと、チャールスは薄く嗤った。なにか言いかけたが、気が変わったらしかった。つと右手を伸ばして乳房を握った。掌にすっぽり収まった半球の根元に指を喰い込ませて、ぎりぎりと絞りあげた。そうしながら腰に巻いた鎖を左手で引き上げて、エレンを爪先立たせた。

（答えをはぐらかした罰なのかしら……？）

エレンはうなだれて、無言でつぎの仕打ちを待った。が、それ以上のことはされなかった。

「つぎは、こんな具合に可愛がってやるぞ」

チャールスはエレンを突き放すと、ドアに向かってひらひらと手を振った。

「……はい、よろしく願いたします」

そう返事するしかなかった。エレンは奴隷にふさわしい態度で腰をかがめてから、そのまま後ずさって部屋を出た。

屋敷の中もランプで照らされていたが、真

昼のような寢室の明るさに慣れた目には薄暗く見えた。外へ出ると、星明りの中に黒くうずくまった垣根の向こうに、奴隷小屋の屋根が並んでいる。そちらへ向かって、エレンはひとりでとぼとぼと歩いた。

逃げ出そうと思えば、夜明けまでに二十マイルくらいは歩ける。そして、狩猟犬と監督たちに追いつかれて連れ戻され――肉をずたずたに切り裂かれて骨が見えるまで鞭打たれる。奇跡的に逃げおおせたとしても、荒野で飢えと渇きに苛まれて野垂れ死に。町へ潜りこんだところで、深夜に残飯をあさって――何日間、見つからないでいられるだろうか。奴隷の帰る場所は、奴隷小屋しかないのだった。

とっくに交尾も終えて、誰もが泥のように眠っている真っ暗な繁殖小屋。エレンは手探りで壁伝いに、寝藁のある場所へ行った。男たちは、自分が寝る場所をだいたい決めている。女たちは、その夜の相手と一緒に寝るか、

自分たち用に確保したスペースに固まって寝るか。エレンは女たちが敷いたシーツの端からこぼれている藁をかき集めて、そこに身を横たえた。